

Oxford Reading Tree Level 7 Stories

- ① Red Planet 「赤い惑星」
- ② Lost in the Jungle 「ジャングルで迷子」
- ③ The Broken Roof 「壊れた屋根」
- ④ The Lost Key 「なくなった鍵」
- ⑤ The Willow Pattern Plot 「柳模様計画」
- ⑥ Submarine Adventure 「潜水艦の冒険」

Red Planet 「赤い惑星」

- PG 1: Wilf came to play with Chip. They made a rocket ship out of bits and pieces.
The rocket ship looked quite good.
ウィルフがチップのところへ遊びに来ました。二人はガラクタを使って宇宙船を作りました。
宇宙船はかなり格好良く見えました。
- PG 2: Wilf and Chip played in the rocket ship. They pretended to be spacemen.
“The rocket is going to take off,” said Wilf.
“Five...four...three...two...”
ウィルフとチップはロケットの中で遊びました。
二人は宇宙飛行士のふりをしました。
「ロケットが離陸します」とウィルフが言いました。
「5...4...3...2...」
- PG 3: Floppy ran up. He wanted to get in the rocket ship with Wilf and Chip.
“Go away, Floppy,” called Chip. “The rocket is going to take off!”
フロッピーが走って来ました。フロッピーもウィルフとチップと一緒にロケットに乗りたいかったです。
「あっちに行ってよ、フロッピー」とチップが叫びました。「ロケットが離陸するんだから」
- PG 4: Nadim came to play.
He had his computer with him, but he liked the look of the rocket ship.
He wanted to play in it too.
ナディムが遊びに来ました。
ナディムは自分のコンピューターを持ってきましたが、ロケットの方がおもしろそうに見えました。
ナディムもロケットで遊びたいと思いました。
- PG 5: Just then, it began to rain. “There’s not room for all of us,” said Chip.
“Let’s go inside and play with Nadim’s computer.”
その時雨が降り始めました。「全員は入れないよ」とチップが言いました。
「中に入ってナディムのコンピューターで遊ぼうよ」
- PG 6: They played a game on the computer. It was called Red Planet.
They had to land a rocket on the planet. Wilf and Chip crashed the rocket.

Nadim didn't. He was good at the game.

三人はコンピューターでゲームをしました。「赤い惑星」というゲームでした。

三人は惑星にロケットを着陸させなければなりませんでした。

ウィルフとチップはロケットを墜落させてしまいました。

ナディムは違いました。ナディムはゲームが上手でした。

PG 7: Suddenly, the magic key began to glow.

Chip and Wilf pulled Nadim away from the computer and ran into Biff's room.

"Come on," called Chip. "It's time for an adventure."

そのとき、マジックキーが光り始めました。

チップとウィルフはナディムをコンピューターから引き離し、ビフの部屋に走って行きました。

「さあ、行こう」とチップが叫びました。「冒険の時間だ」

PG 8: The magic took them to a rocket ship. It took Floppy too.

The rocket looked as if it was about to take off, but the door was open.

Nadim wanted to look inside the rocket.

魔法の力が三人を宇宙船に連れて行きました。フロッピーも一緒でした。

ロケットは今にも離陸しようとしていました。でも、ドアが開いていました。

ナディムはロケットの中を見たいと思いました。

PG 9: "Come on," he called.

Chip didn't want to go inside. "It may not be safe," he said.

"Why not?" said Nadim. "This is a magic adventure."

「さあ行こう」とナディムが大声で言いました。

チップは中には入りたくありませんでした。「安全とは限らないかもいよ」とチップが言いました。

「どうして？」とナディムが言いました。「これは魔法の冒険だよ」

PG 10: They went inside the rocket. There was nobody there.

"Look at this computer," said Nadim.

Floppy jumped up and put his paw on a button.

子どもたちはロケットの中に入りました。そこには誰もいませんでした。

「このコンピューターを見て」とナディムが言いました。

フロッピーが飛び上がって、足をボタンの上に置きました。

PG 11: Five...four...three...two...one. The rocket began to take off.

Up it went and out into space.

"Oh no!" said Chip. "I don't know where we're going."

5...4...3...2...1。ロケットが離陸し始めました。

ふわりと浮き上がり、宇宙へと飛び立ちました。
「どうしよう！」とチップが言いました。
「ぼくたち、どこに向かってるんだろう。わからないよ」

- PG 12: They began to float about inside the rocket.
Nadim found some boots. He put them on.
“We must put these boots on,” he said.
“They will keep us down on the floor.”
ロケットの中でみんなの体がふわふわと浮き始めました。
ナディムが何足かのブーツを見つけました。ナディムはそれを履きました。
「このブーツをはかなくちゃ」とナディムが言いました。
「そうすれば床に立っていられるようになる」
- PG 13: They went to the window and looked out. They saw a big red planet.
“We are going to land on that planet,” said Nadim. “We will soon be there.”
みんなは窓に行って外を見ました。三人は、大きな赤い惑星を見ました。
「ぼくらはあの惑星に着陸するんだ」とナディムが言いました。
「もうすぐ着くよ」
- PG 14: Nadim made the rocket land.
“I wouldn’t like to do that again,” he said.
“It’s a good job Nadim knows about computers,” thought Wilf.
“I wouldn’t like to crash here.”
ナディムはロケットを着陸させました。
「もう二度とやりたくないよ」とナディムが言いました。
「ナディムがコンピューターに詳しくて助かった」とウィルフは思いました。
「ここで墜落したくないもの」
- PG 15: There was red dust all over the planet.
There were red rocks and red mountains. Floppy didn’t like to look of it.
He began to bark and bark.
“There are no trees,” he thought.
その惑星は赤いちりで覆われていました。そこには赤い岩と赤い山がありました。
フロッピーはその様子が好きではありませんでした。
フロッピーは吠え始めました。
「木が一本もない」とフロッピーは思いました。
- PG 16: They wanted to go outside and look at the planet. They found a space buggy.
They looked in the space buggy and found some spacesuits.

子どもたちは外に出てこの惑星を見たいと思いました。すると、宇宙用バギーを見つけました。その宇宙バギーの中を覗くと、そこには宇宙服がありました。

- PG 17: “Let’s put these spacesuits on,” said Wilf. “Then we can go outside.”
“Do you think it will be safe outside?” asked Chip.
“I don’t know,” said Wilf.
「この宇宙服を着よう」とウィルフが言いました。「これで外に出られるぞ」
「外は安全だと思う？」とチップが聞きました。
「さあね」とウィルフが言いました。
- PG 18: They went out on the planet in the buggy.
The buggy bumped over the rocks and the red dust flew up.
“I don’t like this,” thought Floppy.
“I’m not made for space adventures.”
子どもたちは宇宙バギーに乗って惑星の上に出ました。
バギーはがたがた揺れながら岩の上を進み、赤いちりが舞い上がりまし
た。
「ぼくこんなの嫌だ」とフロッピーは思いました。
「ぼく、宇宙冒険には向いていないんだ」
- PG 19: Suddenly the ground cracked and a big hole opened up.
“Oh help,” said Chip, Wilf, and Nadim as the buggy fell into the hole.
突然、地面が割れ大きな穴があきました。バギーがその穴に落ちていく
中、「助けて」とチップ、ウィルフとナディムが言いました。
- PG 20: They fell down and down inside the planet.
“I don’t like this,” thought Floppy. “I want to go home.”
みんな惑星の中へ中へと落ちて行きました。
「こんなの嫌だ」とフロッピーは思いました。「家に帰りたいよう」
- PG 21: They all landed with a bump. The buggy landed with a crash and broke in
two.
They were inside a big cave.
子どもたちはドシンと音を立て、着地しました。バギーはガシャンと真っ二
つに壊れました。子どもたちは大きな洞窟の中にいました。
- PG 22: “What a place!” said Wilf. “Look at it.” Chip looked at the buggy.
“It’s broken,” he said. “It’s had it!” “How will we get back to the rocket?”
「なんてすごい所なんだ！」とウィルフが言いました。「見てよ」
チップはバギーを見ました。
「壊れちゃった」とチップが言いました。「もう、これはだめだ！」

「どうやってロケットに戻ろうか？」

- PG 23: Floppy began to bark. There were some creatures in the cave.
They looked like funny little people.
“Oh no!” said Nadim. “Look at them! I hope they like us.”
フロッピーが吠え始めました。洞窟の中に、何か生き物がいたのです。
おもしろい姿をした小さな人間のように見えました。
「大変だ！」とナディムが言いました。
「あの生き物たちを見てよ！ ぼくらを気に入ってくれるといいけど」
- PG 24: The creatures looked at the boys.
They climbed on the broken buggy and pulled out a spacesuit.
One of them turned a tap on Floppy’s spacesuit.
その生き物たちは、少年たちを見ました。
生き物たちは壊れたバギーによじのぼり、一着の宇宙服を引っ張り出しました。
そのうちの一匹が、フロッピーの宇宙服の栓を回しました。
- PG 25: Floppy’s spacesuit began to fill with air.
It got bigger and bigger. Then Floppy began to float.
“Get Floppy!” yelled Chip. “Don’t let him float away!”
フロッピーの宇宙服が空気でいっぱいになり始めました。
それはどんどん大きくなりました。フロッピーは浮き始めました。
「フロッピーを捕まえて！」とチップが叫びました。
「フロッピーを飛んで行かせないで！」
- PG 26: Wilf asked the creatures how to get out of the cave.
They told him that there was no way out.
They said that they had never been outside.
ウィルフが生き物たちに、どうやって洞窟から出たらいいか聞きました。
生き物たちは、出口はないと言いました。
生き物たちは、一度も外に出たことがないと言いました。
- PG 27: Wilf had a good idea. He took a spacesuit out and he filled it with air.
The space suit got bigger and bigger. It began to float up and up.
ウィルフに名案が浮かびました。
ウィルフは宇宙服を一つ取り出して、それに空気をいっぱい入れました。
宇宙服はどんどん大きくなりました。そして上へ上へと浮かび始めました。
- PG 28 “Hold on,” called Wilf, “and don’t let go!”
The spacesuit floated up out of the cave.

“We can float back to the rocket,” said Chip. “What a good idea!”
“I hope it won’t go pop,” thought Floppy.
「つかまって」とウィルフが叫びました。「離しちゃだめだよ！」
その宇宙服は浮かび上がり洞窟の外へ出ました。
「ぼくらはロケットまで流れて戻ればいい」とチップが言いました。
「なんて、良い考えなんだ！」
「パンとはじけなければいいんだけど」フロッピーは思いました。

- PG 29: They floated back to the rocket.
Wilf let the air out of the spacesuit and it came down to the ground.
“Good old Wilf!” said Nadim.
“I don’t like floating,” thought Floppy.
子どもたちは漂ってロケットまで戻りました。
ウィルフが宇宙服から空気を抜くと、宇宙船は地面に降りていきました。
「やったぞ、ウィルフ！」とナディムが言いました。
「ぼく、ぷかぷか浮かぶのは好きじゃないや」とフロッピーは思いました。
- PG 30: They went inside the rocket and it took off.
Nadim turned on the computer and looked at the screen.
“We’ll soon be home,” he said.
子どもたちはロケットの中に入り、離陸しました。
ナディムがコンピューターを起動させ、画面を見ました。
「もうすぐ家に着くよ」とナディムが言いました。
- PG 31: Just then the magic key began to glow.
“That’s good,” thought Floppy. “They won’t have to land the rocket. Dogs don’t like space adventures”
その時、マジックキーが光り始めました。
「良かった」とフロッピーは思いました。
「子どもたちがロケットを着地させなくていいんだ。犬は宇宙の冒険なんか好きじゃないんだ」
- PG 32: The magic took them back home.
“I liked that adventure,” said Wilf.
He looked at the little spacesuit.
So did I,” said Nadim, “but I’m glad I didn’t have to land that rocket again.”
魔法の力がみんなを家に連れて帰りました。
「あの冒険、気に入ったよ」とウィルフが言いました。
ウィルフは小さい宇宙服を見ました。
「ぼくもだよ」とナディムが言いました。
「でも、あのロケットをまた着陸させなくて済んで、ほんとによかったなあ」

Lost in the Jungle 「ジャングルで迷子」

- PG 1: The next day was Mum's birthday. Chip had a box of chocolates for her. Kipper had made her a monkey at school. Biff didn't know what to get.
明日はママの誕生日です。チップは箱入りのチョコレートを用意しました。
キッパーは学校でママのために猿を作っていました。
ビフは何を用意すればいいのかわからずにいました。
- PG 2: Biff asked Anneena's mum to help her buy a plant. They went into a big greenhouse. The greenhouse was hot, and it was full of plants. ビフはアニーナのママに、植物を買うのを手伝ってくれるようお願いしました。
みんなで大きな温室へ行きました。温室は暑くて植物がたくさんありました。
- PG 3: "What a lot of plants!" said Biff. "It's like a jungle in here. I don't know which one to buy."
In the end, she found one that she liked. "I'll get this one for Mum," she said.
「なんてたくさんの植物でしょう」とビフが言いました。「ここはジャングルみたいだわ。私、どれを買ったらいいのかわからない」
ついに、ビフはお気に入りを見つけました。
「ママにこれを買ってあげよう」とビフが言いました。
- PG 4: The next day was Mum's birthday and the children gave her their presents. Mum liked them all.
"Thank you," she said. "What a lovely plant, Biff!"
次の日はママの誕生日でした。子どもたちはプレゼントを渡しました。ママはそのプレゼントが全部気に入りました。
「ありがとう」とママが言いました。「何て素敵な植物なの、ビフ！」
- PG 5: Dad had a present for Mum. It was a plant.
"I didn't know Biff had a plant as well," said Dad.
"I don't mind a bit," said Mum.
パパもママにプレゼントがありました。それは一鉢の植物でした。
「ビフも植物を用意してたなんて、知らなかったな」とパパが言いました。

「私はちっとも気にならないわよ」とママが言いました。

- PG 6: Anneena came to play with Biff and Chip.
“This is from my mum,” she said. Wilma’s mum came round with a plant too.
“Thank you,” said Mum. “I love plants. It’s quite like a jungle in here.”
アニーナがビフとチップと遊びに来ました。
「これは私のママからです」とアニーナが言いました。
ウィルマのママも植物を持ってやってきました。
「ありがとう」とママが言いました。「私は植物が大好きなの。ここはまるでジャングルみたいね」
- PG 7: The children went to play in Biff’s room. Anneena looked at the little house.
“Can we have a magic adventure?” she asked.
“We can if the key glows,” said Kipper. Just then the key did begin to glow.
子どもたちはビフの部屋に遊びに行きました。アニーナは小さな家を見つめました。
「私たち、魔法の冒険に行けるかしら？」とアニーナが言いました。
「マジックキーが光ればね」とキッパーが言いました。まさにその時、マジックキーが光り始めたのです。
- PG 8: The magic took them into a jungle. The jungle was full of plants.
“It’s wonderful,” said Biff.
“Look at that one; it’s ten times bigger than the one I gave Mum.”
魔法の力が子どもたちをジャングルの中へ連れて行きました。
ジャングルは植物でいっぱいでした。
「素晴らしいわ」とビフが言いました。
「あれを見て、私がママにあげたものの十倍も大きいわ」
- PG 9: They saw a monkey up a tree. It jumped up and down on the branch.
“That monkey looks cross,” said Kipper. “I don’t think it likes us.”
“It looks like you,” said Chip.
子どもたちは木の上に一匹の猿を見つけました。猿は枝の上でぴょんぴょん跳び跳ねています。
「あの猿、怒っているみたいだ」とキッパーが言いました。
「ぼくらの事が気に入らないんじゃないかな」
「君にそっくりだ」とチップが言いました。
- PG 10: The monkey was angry with the children. It shook the branch.
Then it began to throw things at them.
“We can’t stay here,” said Biff. “Come on.”

猿は子どもたちに腹を立てていました。猿は枝を揺すりました。
そして、子どもたちに物を投げ始めました。
「ここにはいられないわ」とビフが言いました。「行きましょう」

- PG 11: They ran through the jungle, but suddenly Chip stopped.
“Oh no!” he said, “Look at this.”
There was a big snake in the way.
“We can’t go this way,” said Chip. “Come on.”
子どもたちはジャングルの中を走りました。しかし突然チップが止まりました。
「大変だ！」とチップが言いました。「これを見て」
一匹の大きな蛇が行手をふさいでいました。
「こっちの道はだめだ」とチップが言いました。「行こう」
- PG 12: They came to a river. There were alligators asleep on the bank.
“Don’t wake them up,” said Kipper. “They might get angry.”
“They might like you for dinner,” said Biff.
子どもたちは川までやって来ました。川岸にワニが寝ていました。
「あいつらを起こすなよ」とキッパーが言いました。「怒らせてしまうかも」
「ごちそうにされちゃうかもね」とビフが言いました。
- PG 13: Suddenly they fell into a big net. It pulled them up in the air.
“Oh help!” called Anneena. “We’re in a trap.”
突然子どもたちは大きな網の中に落ちてしまいました。そして空中へ引
っぱり上げられました。
「わあ、助けて！」とアニーナが叫びました。「罠にかかったわ」
- PG 14: The children were hanging in the net. The net was a trap to catch animals.
“Help! Help!” called the children.
“Let us down!” called Kipper.
子どもたちは網にかかり宙づりになりました。それは動物を捕まえるため
の網でした。
「助けて！ 助けて！」と子どもたちが叫びました。
「ぼく達をおろして！」とキッパーが叫びました。
- PG 15: A man and a lady came out of the trees. They were explorers.
“Don’t worry,” said the lady, “we’ll soon get you down.”
男の人と女の人が木の陰から出てきました。二人は探検家でした。
「心配しないで」と女の人が言いました。「すぐに下ろしてあげるから」
- PG 16: “What are you doing in the jungle?” asked the man. “Are you lost?”
“Yes,” said Biff. “I think we are.”

“So are we,” said the lady, “but then we have been lost for years.”
「君たちはジャングルで何をしてるんだい？」と男の人が聞きました。
「道に迷ったのかな？」
「はい」とビフが言いました。「迷ったみたいです」
「私たちもよ」と女の人と言いました。「でも私たちはそれからもう長い間、
迷ったままなの」

PG 17: She showed them a picture.
“We are looking for this place,” she said.
“It’s called the Lost City. Nobody lives there. It’s been lost for years and years.”
女の方は子どもたちに絵を見せました。
「私たちはこの場所を捜しているのよ」と女の人と言いました。
「ここは『失われた都』と呼ばれているの。誰もそこには住んでいないわ。
何年もの間その都は消えたままなの」

PG 18: The children liked the explorers.
They wanted to help them find the Lost City.
“Maybe we can find it today,” said Kipper.
“I don’t think so,” said the man. “We have been looking for years.”
子どもたちは、その探検家たちが好きになりました。
そして、『失われた都』を見つけるのを手伝いたいと思いました。
「ひょっとしたら、今日その町が見つかるかもしれないよ」とキッパーが
言いました。「そうは思わないな」と男の人が言いました。
「私たちは何年もの間、探し続けているんだから」

PG 19: They came to a rope bridge.
“Maybe the Lost City is over there,” said Biff. “Let’s go and see.”
They began to cross the bridge.
“I hope it’s safe,” said Kipper.
一行は、ロープのつり橋までやって来ました。
「ひょっとしたら、『失われた都』は橋の向こうにあるのかもしれない」とビフ
が言いました。
「行ってみましょう」一行は橋を渡り始めました。
「安全だといいいんだけど」とキッパーが言いました。

PG 20: They found a boat on the bank of the river.
The boat was full of water.
“Oh good!” said the explorers. “We lost this boat years ago.”
一行は一隻のボートを川岸で見つけました。
ボートの中は水でいっぱいでした。「ああ、良かった！」と探検家たちが
言いました。

「昔、私たちがなくなってしまったボートなんだ」

- PG 21: They got in the boat and paddled up the river.
“Look at all the alligators!” said Chip. “I hope it’s not their dinner time.”
一行はボートに乗りこみ、こぎ進んで行きました。
「見て、ワニがあんなにたくさん！」とチップが言いました。
「あいつらの食事時じゃなければいいんだけど」
- PG 22: They came to a waterfall. The explorer could not stop the boat.
The paddle had broken.
“Look out!” he called. “We’re going to get wet.”
滝にやって来ました。探検家はボートを止めることができませんでした。
オールが壊れていたのです。
「気を付けて！」と探検家が叫びました。「ずぶぬれになるぞ」
- PG 23: The boat went through the waterfall.
“Oh help,” said Anneena. “I don’t like getting wet.”
“Think of the alligators,” said Chip. “It’s better than getting eaten!”
ボートは滝の中をくぐって行きました。
「助けて」とアニーナが言いました。「私、濡れたくない」
「ワニのことを考えてごらん」とチップが言いました。
「やつらに食べられるよりまだよ！」
- PG 24: Behind the waterfall there were some steps. The steps went up and up for a long way. Nobody could see how far they went.
“This may be the way to the Lost City,” said the lady. “Come on.”
滝の後ろに階段がありました。階段はとても長く、ずっと上まで続いていました。それがどこまで続くのか、誰にもわかりませんでした。
「これが『失われた都』へ続く道なのかもしれないわ」と女の人がいきました。
「行きましょう」
- PG 25: As they climbed the steps, some bats flew past them.
“If this is the way to the city, I can see how it got lost,” said Anneena.
“It’s such a long way up.”
階段を上がっていくと、こうもりたちがすぐそばを飛んで行きました。
「もしこれが都に続く道なら、どうしてなくなったのかがわかるわ」とアニーナが言いました。「とても遠く高いところにあるもの」
- PG 26: “It’s the Lost City!” shouted the explorers. “We have found it at last.”
The man threw his hat in the air and his wife jumped up and down.
“I knew we’d find it today,” said Kipper.

「これが『失われた都』だ！」探検家たちが叫びました。「やっと見つけた」男の人は帽子を放り投げ、奥さんは飛び跳ねました。「今日見つかるって、ぼくにはわかっていたんだ」とキッパーが言いました。

PG 27: Nobody had been in the city for years. There were plants and trees everywhere.

Biff pulled a plant out of a wall.

“This is like the one I gave Mum,” she said.

もう何年も、誰もこの都に来た事はありませんでした。

そこら中に木や草がありました。

ビフはある植物を壁から取りました。

「これは私がママにあげたのにそっくりだわ」とビフが言いました。

PG 28: They went to a big building and they opened the doors.

“Oh look!” they all gasped. Everything inside the building was made of gold.

一行は大きな建物まで行きドアを開けました。

「わあ、見て！」誰もが息を呑みました。建物の内側は全て金で出来ていました。

PG 29: The floor was gold and the walls were gold.

There were some gold steps that went up to a gold throne.

“What a wonderful place!” said Anneena. “There’s gold everywhere.”

床は金、壁も金です。そこには、金の王座に登って行く金の階段がありました。

「何て素晴らしい所なの！」とアニーナが言いました。「そこら中に金があるわ」

PG 30: Kipper sat on the gold throne.

A monkey jumped down behind him.

“Look at me!” he said.

“Look at that monkey behind Kipper,” said Biff.

“Which one is the monkey?” asked Chip.

キッパーは金の王座に座りました。

一匹の猿がキッパーの背後に飛び降りてきました。

「ぼくを見て！」とキッパーが言いました。

「キッパーの後ろの猿を見て」とビフが言いました。

「どっちが猿だろう？」とチップがたずねました。

PG 31: Suddenly, the key began to glow.

“It’s time to go home,” said Chip.

“Goodbye,” said the explorers. “Thank you for helping us find the Lost City.”

“I wish we had a magic key,” said the man.

突然、マジックキーが光り始めました。

「家に帰る時間だ」とチップが言いました。

「さようなら」と探検家たちが言いました。「『失われた都』を見つけるのを手伝ってくれてありがとう」

「私たちにもマジックキーがあったらな」と男の人が言いました。

PG 32: The magic took the children home.

Biff still had the plant she found in the Lost City.

“I’ll put it in Mum’s jungle,” she said.

“I know where we can get a monkey too.”

魔法の力が子どもたちを家へつれ戻しました。

ビフは『失われた都』で見つけた植物を持っていました。

「私、これをママのジャングルに加えるわ」とビフが言いました。

「私、どこに猿がいるかも知ってるわ」

The Broken Roof 「壊れた屋根」

- PG 1: It was games time at school. The children were outside on the field.
Anneena ran up to Mrs May.
“Come and see something, Mrs May,” she said.
学校では、体育の時間でした。子どもたちは運動場に出ていました。
アニーナがメイ先生のところへ走ってきました。
「メイ先生、来て下さい。見て欲しい物があるんです」アニーナが言いました。
- PG 2: Someone had broken the fence down and dumped junk on the field.
Wilf was cross.
“We don’t want junk on our field,” he said.
“The field isn’t a dump,” said Mrs May.
誰かが柵を壊して、ガラクタを運動場に捨てていたのです。
ウィルフは腹が立ちました。
「運動場にゴミなんか捨てて欲しくないよ」とウィルフが言いました。
「運動場はゴミ捨て場ではないわ」とメイ先生が言いました。
- PG 3: Then Mrs May saw something in the junk.
“Do you see this?” she asked the children.
“It’s a mangle. It gets the water out of wet clothes.”
“How does it do that?” asked Anneena.
その時、メイ先生がガラクタの中に何かを見つけました。
「これ、わかる？」と先生が子どもたちに聞きました。
「これは手回し式脱水機よ。濡れた服の水をしぼり出すのに使うの」
「どうやって使うんですか？」とアニーナが聞きました。
- PG 4: Mrs May took the mangle to the classroom.
She showed the children how it worked. First she got a big sheet and made it wet.
Then Nadim turned to the handle and Biff helped Mrs May put the sheet through.
メイ先生は脱水機を教室に持って行きました。
先生は子どもたちに使い方を見せました。最初に大きなシートを出し、それを濡らしました。次にナディムがハンドルを回し、ビフはメイ先生がシートを通すのを手伝いました。
- PG 5: The water ran out of the sheet and went into a bucket.

“We don’t use mangles now to get clothes dry,” said Mrs May. “What do we use?”

シーツから水が流れだし、バケツに落ちました。

「今はもう、服を乾かすためにこの脱水機は使わないわ」とメイ先生が言いました。「何を使うかわかる？」

PG 6: Mrs May showed the children a picture of someone washing clothes a long time ago.

Mrs May asked the children if they had any old things at home.

Some of the children said they had.

メイ先生は子どもたちに、昔の人が服を洗っている絵を見せました。

メイ先生は子どもたちの家に何か古い物があるか聞きました。

子どもたちの何人かはあると言いました。

PG 7: When Biff and Chip got home from school they looked at the little house.

“The house looks very old,” said Chip, “and so do these little children.

Let’s take them to school.”

ビフとチップは家に帰ると、ミニチュアの家を見ました。

「この家はとても古そうだな」とチップが言いました。「この子どもたちも昔の人たちみたい。これを学校に持って行こう」

PG 8: Kipper didn’t want them to take the little house to school.

“What about the magic?” he asked Biff.

“The magic won’t work if we don’t take the key,” said Biff.

キッパーは、そのミニチュアの家を学校に持って行かれるのは嫌でした。

「魔法はどうなるの？」とキッパーがビフにたずねました。

「マジックキーを持っていかなければ、魔法は働かないわ」とビフが言いました。

PG 9: Some of the children took old things to school.

“What a lot of things,” said Mrs May.

“We can find out all about them and have a display.”

子どもたちの何人かが古い物を学校に持ってきました。

「何てたくさんあるんでしょう」とメイ先生が言いました。

「一つ一つ調べてから、展示しましょう」

PG 10: Mrs May liked the little house and so did all the children.

Biff and Chip didn’t say that the house was magic. That was a secret.

メイ先生はミニチュアの家が気に入りました。子どもたちもみな同じでした。

ビフとチップはそれが魔法の家だとは言いませんでした。秘密だったのです。

- PG 11: Wilf was being silly. He climbed on Mrs May's table and pushed some books over. The books fell on to the little house with a crash.
"Oh no!" said Biff.
ウィルフはふざけていました。ウィルフはメイ先生の机に乗り、本を何冊も押し倒しました。本が小さな家の上に落ち、ガチャンと音をたてました。「やだ、どうしよう！」とビフが言いました。
- PG 12: One of the books made a hole in the roof.
Wilf was very upset when he saw that the roof was broken.
"I'm sorry," he said. "Perhaps I can get my dad to mend it."
本の一冊が当たって、屋根に穴が開いてしまいました。
ウィルフは屋根が壊れたのを見て、おろおろしました。
「ごめんね」とウィルフが言いました。
「もしかしたら、ぼくのパパに直してもらえるかもしれない」
- PG 13: Biff and Chip took the house home. Kipper was cross when he saw it was broken.
He had the magic key in his hand.
"Will the magic still work?" he asked. Just then the key began to glow.
ビフとチップはその家を持って帰りました。キッパーは家が壊れているのを見て怒りました。
キッパーはマジックキーを手にしていました。
「魔法はまだ働くかな？」とキッパーがたずねました。ちょうどその時、マジックキーが光り始めました。
- PG 14: A new adventure began. The magic took the children back in time.
It took them back to their house a long time ago.
The house looked new but the roof was broken.
新しい冒険の始まりです。魔法の力が子どもたちを過去へ連れて行きました。
昔の時代の、子どもたちの家へ連れて行ったのです。
家は新しく見えたが、屋根が壊れていました。
- PG 15: There were three children playing outside and two men were mending the roof.
"Didn't our house look nice a long time ago?" said Biff.
"But how did the roof get broken?"
三人の子どもたちが外で遊んでいて、二人の男の人が屋根を直しています。
「昔の私たちの家、素敵じゃない？」とビフが言いました。
「でも、どうして屋根が壊れたのかしら？」

- PG 16: The children saw Biff, Chip and Kipper, and ran up to them.
 “Hello,” they said. “Who are you?”
 “I’m Biff,” said Biff. “This is Chip, and this is Kipper.”
 子どもたちがビフとチップとキッパーを見て走って来ました。
 「こんにちは」と三人が言いました。「君たちは誰？」
 「私はビフ」とビフが言いました。「こっちはチップで、こっちはキッパーよ」
- PG 17: “What funny names!” said the girl.
 “My name is Victoria, this is Edward, and this is Will.”
 “What funny clothes you have!” said Will.
 “Not as funny as yours!” said Kipper.
 「何て、おかしい名前！」と女の子が言いました。
 「私の名前はヴィクトリア、この子がエドワードで、こっちはウィルよ」
 「君たちは何ておかしい服を着てるんだい！」とウィルが言いました。
 「君たちほどじゃないよ！」とキッパーが言いました。
- PG 18: Kipper looked up at the men on the roof.
 “How did the roof get broken?” he asked.
 “We don’t know,” said Edward. “It was broken when we woke up.”
 “That’s funny,” said Kipper.
 キッパーは屋根の上の男の人たちを見上げました。
 「どうして屋根が壊れたの？」とキッパーがたずねました。
 「それがわからないんだ」とエドワードが言いました。「起きたら壊れてい
 たんだ」
 「それはおかしいな」とキッパーが言いました。
- PG 19: A lady came out and called to the children.
 “Go inside and wash your hands,” she said. “It’s time for tea.”
 “Is that your mother?” Biff asked.
 “No,” said Edward. “That’s our cook.”
 一人の女の人が出てきて子どもたちを呼びました。
 「中に入って手を洗いなさい」と女の人と言いました。「お茶の時間よ」
 「あの人、あなたのお母さん？」とビフが聞きました。
 「違うよ」とエドワードが言いました。「あの方は料理係さ」
- PG 20: The children went into the kitchen. The cook looked at Biff, Chip, and Kipper.
 “May they stay to tea?” asked Victoria.
 “They have funny clothes,” said Cook, “but yes.”
 子どもたちは台所に行きました。料理係はビフとチップとキッパーに気づ
 きました。

「三人もお茶に加わってもいい？」とヴィクトリアがたずねました。
「おかしな服を着ているのね」と料理係が言いました。「でも、まあ、いいでしょう」

PG 21: Biff looked round the kitchen.
“This is not like our kitchen,” she said. Cook looked at Chip’s hands.
“Go and wash your hands,” she said. “You can’t have tea until you do.”
ビフは台所を見まわしました。
「ここは私たちの台所とは違うみたい」とビフが言いました。料理係がチップの手を見つめました。
「手を洗ってきなさい」と料理係が言いました。「手を洗うまで、お茶はお預けです」

PG 22: After tea, Cook made the children wash their hands again.
Then she told Edward to take some tea to the workmen.
“Come and see our rooms,” said Edward.
お茶の後、料理係は子どもたちに再び手を洗わせました。
そして、料理係は職人さんたちにお茶を持って行くよう、エドワードに言いました。「ぼくたちの部屋を見においでよ」とエドワードが言いました。

PG 23: The broken roof was in Edward’s room.
“Is it mended yet?” he asked.
“It won’t be long now,” said the man.
“Thanks for the tea.”
壊れた屋根はエドワードの部屋の屋根でした。
「もう直ったの？」とエドワードがたずねました。
「もうすぐだよ」と職人さんは言いました。
「お茶をありがとう」

PG 24: The children went into Victoria’s room.
Victoria had a little room in her bedroom. It was the one Biff had.
“We keep toys in here,” said Victoria. “Come and look.”
子どもたちはヴィクトリアの部屋へ行きました。ヴィクトリアの寝室には、もうひとつの小さな部屋がありました。それはビフの部屋にあるのと同じ部屋でした。
「私たちはおもちゃをここにしまっておくの」とヴィクトリアが言いました。
「見てごらん」

PG 25: Biff, Chip, and Kipper looked at the children’s toys. Chip loved the rocking horse.
“I wish we had a horse like this,” said Kipper.
“So do I,” said Biff.

ビフとチップとキッパーは子どもたちのおもちゃを見ました。
チップは揺れる馬のおもちゃが気に入りました。
「うちにもこんな馬があったらいいのに」とキッパーが言いました。
「私もそう思う」とビフが言いました。

- PG 26: Victoria took Biff, Chip, and Kipper into the little room.
“Come and see this,” she said.
“What is it?” asked Kipper.
ヴィクトリアはビフとチップとキッパーを小さな部屋へ連れて行きました。
「これを見て」とヴィクトリアが言いました。
「これは何？」とキッパーがたずねました。
- PG 27: Victoria showed them a little house.
She told them that her father was making it for them.
“It will look like this house,” she said.
“We know,” said Biff.
ヴィクトリアは三人に小さな家を見せました。
そして、お父さんが自分たちのために作ってくれている最中なのだと言いました。
「私たちの家そっくりになるのよ」とヴィクトリアが言いました。
「知ってるわ、私たち」とビフが言いました。
- PG 28: Edward looked at Chip’s watch and Chip looked at Edward’s boat.
“Do you want to swap?” asked Edward.
“Yes, please,” said Chip, “then I can take the boat to school to show Mrs May.”
エドワードはチップの腕時計を、チップはエドワードの船を見ました。
「とりかえっこする？」とエドワードが聞きました。
「うん、そうしよう」とチップが言いました。
「そうすれば学校に持って行って、メイ先生に船を見せられる」
- PG 29: Suddenly, the magic key began to glow.
“It’s time to go,” said Kipper, “but I don’t want to.”
“Will you come back?” asked Edward.
“We don’t know, said Biff. “Maybe.”
その時、マジックキーが光り始めました。
「もう行く時間だ」とキッパーが言いました。「でもぼく行きたくないよ」
「また来る？」とエドワードがたずねました。
「さあね」とビフが言いました。「もしかしたらね」
- PG 30: The magic took the children home. They looked at the little house.
“The broken roof has been mended,” said Biff. “How did that happen?”

魔法の力が子どもたちを家に連れ戻しました。三人は小さな家に目をやりました。

「壊れた屋根が直っているわ」とビフが言いました。「どういうことかしら？」

PG 31: “I don’t know,” said Chip, “maybe Dad mended it.”

“I think the workmen in the adventure did it,” said Kipper. “We saw them.”

“I think it was magic,” said Biff.

「さあね」と、チップが言いました。「もしかしたらパパが直してくれたのかもね」「ぼくは冒険で出会った職人さんたちがやったんだと思うな」キッパーが言いました。「見たじゃないか」

「私は魔法だと思うわ」とビフが言いました。

PG 32: “I liked that adventure best of all,” said Biff. “I liked those children long ago. I’d like to go back and see them again.”

“Me, too,” said Chip, looking at the boat. “Maybe I could get my watch back!”

「私、今回の冒険が一番気に入ったわ」とビフが言いました。

「あの昔の子どもたち、好き。また戻って会いたいな」

「ぼくも」とチップが船を見ながら言いました。

「もしかしたら、ぼくの腕時計を返してもらえるかもしれないね！」

The Lost Key 「なくなった鍵」

- PG 1: Kipper wanted a magic adventure but the magic key would not glow. It had not glowed for a long time.
“Maybe it will glow if I keep it with me, he thought, so he put it in his pocket.
キッパーは冒険がしたいと思っていましたが、マジックキーは光りそうもありません。マジックキーはもうずいぶん長い間光っていませんでした。「もしかしたら、ぼくが肌身離さず持っていれば光るかもしれない」とキッパーは思いました。そこで、マジックキーをポケットに入れました。
- PG 2: Mum had to go shopping. She wanted Kipper to go with her.
“I want to get you some new trainers,” she said, “so come on.”
Kipper forgot he had the key in his pocket.
ママは買い物に行かなければなりません。ママはキッパーにも一緒に来て欲しがっています。
「あなたに新しい運動靴を買いたいのとママは言いました。
「だから一緒に来てちょうだい」
キッパーはポケットにマジックキーが入っていることを忘れていました。
- PG 3: On the way to the shops, Mum let Kipper stop and play.
He ran to the rocket and the key fell out of his pocket on to the grass.
“Look at me, Mum!” he called.
お店に行く途中で、ママはキッパーを遊ばせてあげました。
キッパーはロケットの方へ走って行きました。その時、マジックキーがポケットから草むらに落ちてしまいました。
「ママ、見て！」とキッパーは叫びました。
- PG 4: Kipper looked in his pockets but the key was not there.
“Oh no!” said Kipper. “Where is the key? I can’t have lost it, can I?”
But he had lost the key.
キッパーはポケットの中を見ましたが、マジックキーはありませんでした。「どうしよう！」とキッパーが言いました。「マジックキーはどこ？ ぼく、なくしてなんかいらないよね？」
でも、キッパーはマジックキーをなくしてしまっていたのです。
- PG 5: Kipper wanted to go and look for the key, but Mum would not let him.
It had started to rain and Mum wanted to get home.
“Ask Biff and Chip to look for it,” she said.
キッパーはマジックキーを探しに行きたかったのですが、ママが許しませ

んでした。雨が降り出していたので、ママは家に帰りたかったのです。
「ビフとチップに捜してもらおうように頼みなさい」とママが言いました。

- PG 6: A man came to cut the grass. He cut it with a mower.
The mower ran over the magic key with a clang.
“What was that?” said the man.
おじさんが草刈をしに来ました。草刈機で草を刈りました。
草刈機がマジックキーに乗り上げ、がちゃんと大きな音を立てました。
「何事だ？」とおじさんは言いました。
- PG 7: The key had broken the mower.
“Grrrrr!” the man said, crossly. “Now I shall have to mend the mower.”
He was so cross that he threw the magic key in a bin.
マジックキーが草刈機を壊してしまいました。
「クーツ」と、おじさんが怒るように言いました。
「もう、草刈機を直さなくちゃならないな」
おじさんはひどく頭にきたので、マジックキーをごみ箱に捨ててしまいました。
- PG 8: Two boys came to play on the swings.
One of the boys looked in the bin and found the key.
“Look at this old bent key,” he said. “What shall we do with it?”
二人の少年がブランコに乗りに来ました。
少年の一人がごみ箱の中を覗きマジックキーを見つけました。
「この古い曲がった鍵を見てよ」と少年が言いました。「これ、どうしようか？」
- PG 9: The boys took the key with them. One of them had some string.
He tied it to the string and spun it round and round.
少年たちは鍵を持っていきました。一人がひもを持っていました。
その子は鍵にひもを結んで、くるくると回しました。
- PG 10: Suddenly the string broke and the key flew through the air.
It hit a greenhouse with a crash and broke the glass.
“Oh no!” said the boys.
すると突然ひもが切れ、鍵が空中を飛びました。
そして温室に当たってガチャンと音をたて、ガラスを割りました。
「しまった！」と男の子たちが言いました。
- PG 11: “Look at my greenhouse!” yelled the man.
“The glass is broken.”
The boys ran away as fast as they could.

“Just you come back here,” called the man.
「私の温室を見てみなさい！」とおじさんが叫びました。
「ガラスが割れたじゃないか」
男の子たちは力いっぱい走って逃げました。
「おい、戻って来い」とおじさんは叫びました。

- PG 12: Kipper had to tell Biff and Chip that he had lost the magic key.
“I think I lost it by the rocket,” he said, “but Mum wouldn’t let me look for it.”
“Come on,” said Chip. “We must find it.”
キッパーは、ビフとチップにマジックキーをなくしたことを言わなければなりませんでした。
「ぼく、ロケットの近くでなくしたと思う」とキッパーが言いました。「でも、ママが捜させてくれなかったんだ」
「行こう」とチップが言いました。「鍵を見つけなきゃ」
- PG 13: Wilf and Wilma helped them look for the lost key.
Biff asked the man if he had seen it.
“Yes,” said the man. “I threw it in that bin, but two boys took it out.”
ウィルフとウィルマも、三人がなくなった鍵を捜すのを手伝いました。
ビフはおじさんに、鍵を見なかったか聞きました。
「ああ」とおじさんが言いました。
「ごみ箱に捨てたが、二人の男の子が取って行ったよ」
- PG 14: The children saw the two boys. They asked them if they had found the key.
“Yes,” said the boys, “but we lost it again. We broke a man’s greenhouse with it.”
子どもたちは二人の少年に会いました。そして、鍵を見つけたか聞きました。
「見つけたよ」と少年たちは言いました。「でも、またなくしてしまったんだ。ぼくら、その鍵でおじさんの温室を壊しちゃったんだ」
- PG 15: They saw the man with the greenhouse.
“We are sorry about the broken glass,” said Chip, “but could we have the key?”
“Sorry,” said the man. “I sold the key to the junk shop to help pay for the glass.”
子どもたちは温室のおじさんに会いました。
「壊れたガラスの事はお気の毒でした」とチップが言いました。
「でも、鍵は返してもらえますか？」
「すまないが」とおじさんが言いました。「鍵はガラス代の足しにするために、ガラクタ屋へ売ってしまったんだよ」

- PG 16: The children went to the junk shop.
They told the lady about the key and asked her if she had it.
“Sorry,” said the lady. “I have just sold it.”
子どもたちは、ガラクタ屋へ行きました。
そしておばさんに鍵の話をして、おばさんが持っているか聞きました。
「悪いわね」とおばさんが言いました。「たった今、売れちゃったのよ」
- PG 17: The lady told them who had it.
“A man came in,” she said. “He wanted some old keys.”
She told them that the man had a shop down the street.
おばさんは子どもたちに、誰が鍵を持っているかを教えてくださいました。
「男の人が来たの」とおばさんが言いました。「その人は古い鍵を欲しがっていたわ」おばさんは、通りを進んで行った所にその男の人お店を持っていることを教えてくださいました。
- PG 18: The children went to the man’s shop.
In the window there were pictures and paintings.
“Why do you think the man wants old keys?” asked Wilf.
子どもたちはその男の人の店へ行きました。
ウィンドーの中には写真や絵が飾られていました。
「どうしてこの男の人は古い鍵が欲しいんだと思う？」とウィルフが聞きました。
- PG 19: Wilma looked inside the shop. It was closed and she couldn’t see the man.
“We must get our pocket money,” said Biff.
“We may have to buy the key back.”
“Let’s go home, then,” said Chip.
ウィルマが店の中を覗きました。店は閉まっていて、男の人は見えませんでした。
「お小遣いを取ってこなくちゃ」とビフが言いました。
「鍵を買い戻す事になるかもしれない」
「じゃ、家に帰ろう」とチップが言いました。
- PG 20: Mum went to the shop with the children. She told the man about the key and how Kipper had lost it. She asked if they could have the key back.
“Yes,” said the man. “If you can find it.”
ママが子どもたちと一緒に店へやって来ました。ママは男の人に鍵の事と、キッパーがそれをなくしたいきさつを話しました。ママは鍵を返してもらえるかどうか聞きました。
「いいよ」とおじさんは言いました。「その鍵が見つけれたらね」

- PG 21: The man had painted some pictures and had put lots of keys in them.
All the keys had been painted.
The children looked at the pictures but they couldn't see the magic key.
おじさんは絵を描いていて、その中にたくさんの鍵を入れていました。
鍵は全部塗られていました。
子どもたちは絵を見ましたが、マジックキーは見つかりませんでした。
- PG 22: They looked at all the pictures.
"All the keys look the same," said Biff.
Suddenly Kipper saw a little picture. It had one key in it.
"Here it is," he said. "This is our key."
子どもたちは全部の絵を見ました。
「鍵は全部同じに見えるわ」とビフが言いました。
突然、キッパーが小さな絵を見ました。その中に、鍵が一つ入っていました。
「ここにあったよ」とキッパーが言いました。「これがぼくたちの鍵だ」
- PG 23: The man told them that they would have to buy the picture.
Biff and Chip gave Mum their pocket money, and Mum paid the man.
"It's a lot to pay for an old key," she said.
男の人は、みんなにその絵を買ってもらわなければならないと言いました。
た。
ビフとチップはママにお小遣いを渡し、ママが男の人に代金を払いました。
た。
「古い鍵に払うにしては大金だわ」とママが言いました。
- PG 24: The children pulled the key from the picture and rubbed off the paint.
Then they looked at it.
"The key has not glowed for a long time," said Biff.
"Perhaps it has lost its magic."
子どもたちは鍵を絵から引き離して、絵の具をふきとりました。
そして鍵を見ました。
「もうずいぶんの間、鍵は光っていないわ」とビフが言いました。
「もしかしたら、魔法の力をなくしてしまったのかもしれない」
- PG 25: "It's been out in the rain," said Wilf, "and it's been bent by a mower."
"It's been through a window," said Chip, "and it's been stuck on a painting."
"It's had a bad time," said Wilma.
「外で雨に打たれて」とウィルフが言いました。「草刈機で曲げられちゃった」
「窓を突き抜けたし」とチップが言いました。「絵に貼り付けられてた」

「この鍵、大変な目にあつたよね」とウィルマが言いました。

- PG 26: The children wanted the key to glow.
Wilma picked it up.
“Do you think it will ever glow again?” she said.
“Do you think the magic will still work?”
“I don’t know,” said Biff. “I hope so.”
子どもたちは、鍵が光ることを望んでいました。
ウィルマが鍵を持上げました。
「また光ると思う？」とウィルマが言いました。
「まだ魔法が働くかしら？」
「さあね」とビフが言いました。「そうだといいんだけど」
- PG 27: But the key didn’t glow and the magic wouldn’t work.
Kipper told the key about the adventures he would like to have.
But still the magic wouldn’t work.
けれども鍵は光らず、魔法は働きそうもありませんでした。
キッパーは鍵に、自分がしてみたい冒険の話をしました。
けれども魔法は働きませんでした。
- PG 28: The next day, Wilf and Wilma came to the house with Nadim and Anneena.
The children were sorry about the key.
It still wouldn’t glow and they were all very sad.
次の日、ウィルフとウィルマがナディムとアニーナと一緒に家にやって来ました。子どもたちは鍵のことを残念がりました。
鍵はあいかわらず光りそうもなく、みんなはとても悲しくなりました。
- PG 29: “How can we make the magic work again?” asked Wilma.
Anneena thought of a good idea.
“Let’s remind it of the magic adventures,” she said.
“Maybe that will make it work.”
「どうやったら、また魔法の力を働かせることができるのかしら？」ウィルマが聞きました。
アニーナに名案が浮かびました。
「魔法の冒険のことを、鍵に思い出させるのよ」とアニーナは言いました。
「もしかしたら、それで魔法の力を取り戻させられるかもしれないわ」
- PG 30: But the key still didn’t glow. At last the children gave up.
Mum told Biff and Chip it was time for their friends to go home.
“Cheer up,” said Mum.
けれども鍵は光りませんでした。とうとう子どもたちはあきらめました。

ママはビフとチップに、お友だちは帰る時間だと告げました。
「元気を出して」とママは声をかけました。

- PG 31: Kipper was sorry about the key.
“It’s all my fault,” he said and he began to cry.
“Don’t cry, Kipper,” said Chip. “Maybe the magic has just run out.”
キッパーは鍵の事を申し訳なく思っていました。
「全部ぼくのせいだ」キッパーは言いました。そして、泣き始めました。
「泣かないで、キッパー」とチップが言いました。「もしかしたら、魔法は全部使い切ってしまっただけなのかもしれないよ」
- PG 32: Biff and Chip let Kipper take the key to bed. Kipper looked at it for a long time.
At last he fell asleep. Suddenly, the magic key began to glow.
ビフとチップはキッパーに、鍵をベッドに持って行かせてあげました。
キッパーは長い間、鍵を見つめていました。ようやく、キッパーは眠りにつきました。すると、突然、マジックキーが光り始めたのです。

The Willow Pattern Plot 「柳模様計画」

- PG 1: Biff and Chip were at a car boot sale. They saw Nadim.
“Nadim! Over here!” called Biff.
Nadim ran to see them. He had bought something at the sale.
ビフとチップはガレージセールに来ていました。彼らはナディムに会いました。
「ナディム！ こっちだよ！」ビフが呼びました。
ナディムは彼らに会いに走ってきました。彼はすでにそのセールで何かを買っていました。
- PG 2: It was a blue and white plate. He showed it to Biff and Chip.
“It’s a present for my mum,” said Nadim. “It’s a willow pattern plate. My mum collects them.”
それは青と白のお皿でした。彼はそれをビフとチップに見せました。
「それは僕のママへのプレゼントなんだ」とナディムは言いました。「それは柳模様のお皿なんだ。僕のママは柳模様のお皿を集めているんだ」
- PG 3: “Why is it called a willow pattern plate?” asked Chip.
“I don’t know,” said Nadim, “but I think the pattern tells a story.”
“I wonder what the story is,” said Biff.
「どうしてそれは柳模様のお皿とよばれるの？」とチップが尋ねました。
「わからない。でも僕はその模様はある物語を伝えていると思うんだ」
「どんな物語？」とビフは言いました。
- PG 4: Mum and Dad looked at Nadim’s plate.
“It’s a present for my mum,” said Nadim.
Biff asked if Nadim could come and play. So Nadim went to play with Biff and Chip.
ママとパパはナディムのお皿を見ました。
「それは僕のママへのプレゼントなんです」ナディムは言いました。
ビフはナディムに遊びに来られるか尋ねました。そこでナディムはビフとチップの家に遊びに行きました。
- PG 5: They went up to Biff’s bedroom.
“What shall we play?” asked Nadim.
“I don’t know,” said Biff. Suddenly, the key began to glow.
彼らはビフの寝室に行きました。

「何をして遊ぼうか？」とナディムが尋ねました。
「わからない」とビフが言いました。突然、鍵が光り始めました。

- PG 6: The magic took the children into a new adventure.
“What’s happening?” called Nadim.
“Help!” said Biff. “Everything is going blue!”
魔法は子どもたちを新しい冒険へ連れて行きました。
「何が起きているの？」ナディムが大声で聞きました。
「助けて！」とビフが言いました。「何もかもが青くなっていくわ！」
- PG 7: “What a strange place!” said Chip. “What strange trees!”
“Everything looks blue and white,” said Nadim. “We’re in the land of the willow pattern.”
「何て奇妙な場所だろう！」とチップは言いました。「何て奇妙な木々だろう！」
「すべてのものが青と白に見える。僕たちは柳模様の国にいるんだ」ナディムが言いました。
- PG 8: They were in a big garden. It had a high wall all round it and blue trees grew everywhere.
“I can see water,” said Biff. “Is the garden next to the sea?”
彼らは大きな庭の中にいました。周りじゅうに高い塀があり、青い木々がいたるところに生えていました。
「僕には水が見える」ビフが言いました。「このお庭は、海の隣にあるのかしら？」
- PG 9: “No, it’s next to a lake,” said Nadim. “There’s a bridge,” said Biff. “It’s like the one on the plate.”
“I can see a little house down by the water,” said Chip.
「いや、湖の隣さ」とナディムは言いました。「橋があるわ」とビフが言いました。「まるでお皿にあった橋みたいだわ」とチップが言いました。
「水辺に小さな家が見える」とチップが言いました。
- PG 10: Down by the lake they saw a girl. She was all alone.
“She looks unhappy,” said Biff. “Why is she all alone and why is she crying?”
下の湖のそばに一人の少女が見えました。彼女は一人きりでした。
「彼女は不幸せそうだわ」とビフは言いました。「どうして彼女は一人ぼっちで、どうして泣いているのかしら？」
- PG 11: The girl was called Kim Shee. She lived in the little house by the lake. She had a cruel father. He would not let her go out of the garden.

その少女はキム・シーと呼ばれていました。彼女は湖のそばの小さな家に住んでいました。彼女には残酷な父親がいました。彼は彼女が庭から出ることを許そうとはしませんでした。

PG 12: Kim loved a boy called Chang. She wanted to marry him. But Chang was too poor. Kim's father wanted her to marry a rich man, but Kim loved Chang.

キムはチャンという少年を愛していました。彼女は彼と結婚したいと思っていました。しかしチャンはあまりにも貧乏でした。キムの父親は彼女をお金持ちと結婚させたいと思っていました。でも、キムはチャンを愛していました。

PG 13: Kim Shee heard Chang calling.

"Kim Shee," he called. "Are you alone?"

"Chang!" said Kim. "How did you get here?"

"I swam across the lake," said Chang. "Nobody saw me."

キム・シーはチャンが呼んでいるのが聞こえた。

「キム・シー」とチャンが呼びました。「一人ですか？」

「チャン！」とキムは言いました。「どうやってここへ来たの？」

「湖を泳いで渡ったんです」とチャンは言いました。「誰も私に気づきませんでした」。

PG 14: "Oh!" said Kim. "You are cold and wet."

"It does not matter," said Chang. But Kim Shee was afraid.

"You must go away," she said. "My father must not see you here."

「まあ！あなたは冷えて濡れているわ」とキムは言いました。「そんなことかまいません」とチャンは言いました。しかしキム・シーはびくびくしていました。「あなたは行かないとだめ」と彼女は言いました。「私の父がここであなたを見つけるといけないから」。

PG 15: "This garden is like a prison," said Chang. "Your father never lets you go out."

"But what can we do?" asked Kim.

"We must run away," said Chang. "Then I can marry you."

「この庭は監獄のようですね」とチャンは言いました。「あなたのお父さんはけっしてあなたを出そうとしない」

「でも、私たちどうすればいいの？」とキムは尋ねました。

「僕たちは逃げるしかありません」とチャンは言いました。「そうすれば、僕はあなたと結婚できます」。

PG 16: "But how can I leave the garden?" asked Kim. "There are guards everywhere."

“Don’t worry,” said Chang. “I will think of something.”
「でも、どうやって私は庭から出られるのでしょうか？」とキムは尋ねました。「あらゆるところに警護がいるのです」
「心配しなくてもいい」とチャンは言いました。「何か考えます」。

PG 17: Kim heard the sound of a twig snapping.
“Someone is watching us!” she gasped. Chang jumped to his feet.
He held up a stick.
“Who is there?” he called.
キムは小枝の折れる音を聞きました。
「誰かが私たちを監視しているわ！」彼女は息をのみました。チャンはさっと立ち上がりました。そして、棒を振り上げました。
そこにいるのは誰だ？」チャンは大声で言いました。

PG 18: Then they saw Biff, Chip and Nadim.
“Don’t be afraid,” said Biff. “We are friends.”
“We have never seen children like you before,” gasped Chang. “How did you get into this garden?”
その時、彼らはビフとチップとナディムを見つけました。
「怖がらないで。私たちは友達です」とビフは言いました。
「あなたたちのような子どもは今まで見たことがない」とチャンが驚きながら言いました。「どうやってこの庭に入ってきたの？」

PG 19: “We didn’t mean to listen,” said Chip, “but we heard what you were saying.”
“We know you want to run away,” said Biff.
“But how can we?” asked Kim. “There are guards all round the garden.”
「僕たち、話を聞くつもりはなかったんです」とチップは言いました。「でもあなたたちが言っていることが聞こえてしまいました」。
「あなたたちが逃げ出したいのを知っています」とビフが言いました。
「でも、どうやって？」とキムが尋ねました。「庭じゅうに警護がいます」。

PG 20: Nadim had a good idea. He told them what it was.
“It’s a brilliant idea!” said Chip.
“I’m sure it will work,” said Biff.
“But what if we are caught?” asked Chang.
ナディムがよい考えを思いつきました。ナディムはそれを話しました。
「それはすばらしい考えだ！」とチップが言いました。
「きつとうまくいくと思うわ」とビフが言いました。
「でも、もし捕まったらどうしよう？」とチャンが尋ねました。

PG 21: “Do you have a better idea?” asked Biff.

“No,” said Chang. “It is our only chance.”

“First, you must hide,” said Nadim.

“Then, be ready to run over the bridge,” said Chip.

「あなたにはもっとよい考えがありますか？」とビフは尋ねました。

「いいえ」とチャンは言いました。「それしかチャンスはありません」

「まず、あなた方は隠れなければいけません」とナディムが言いました。

「それから、その橋を走って渡る準備をして下さい」とチップが言いました。

PG 22: “Now we must get ready,” said Nadim.

Kim had a long sash round her waist.

“Give me your sash, Kim,” said Biff.

Kim gave Biff her sash. Biff tied Kim’s sash to the bridge.

「さあ僕たちは準備しなければ」とナディムは言いました。

キムは腰に長い腰帯をしていました。

「あなたの腰帯を下さい、キム」とビフは言いました。

キムは彼女の腰帯をビフに渡しました。ビフはキムの腰帯を橋に結びました。

PG 23: There were lemon trees in the garden.

Nadim and Chip climbed into one. They picked as many Lemons as they could. Then they waited.

庭にはレモンの木が何本もありました。

ナディムとチップは一本の木に登りました。彼らは出来るだけ多くのレモンをもぎとりました。それから彼らは待ちました。

PG 24: Kim and Chang hid by the bridge.

Biff held on to the end of the sash.

“I hope Nadim’s idea works,” she thought. Nadim called from the tree.

“Willow Pattern Plot – begin!” he said.

キムとチャンは橋のそばに隠れていました。

ビフは腰帯の片方の端を握りしめていました。

「ナディムの考えがうまくいきますように」と彼女は思いました。ナディムが木から呼びかけ。

「柳模様の計画、開始！」と彼は言いました。

PG 25: Chip and Nadim began to shout at the guards.

“Come and get us!” they yelled.

“We’re over here.”

The guards ran into the garden. They ran towards Kim Shee’s little house.

チップとナディムは警護に向かって叫び始めました。

「僕たちを捕まえに來い！」と彼らは大声をあげました。

「僕たちはここにいるぞ」

警護は庭の中に駆け込んできました。彼らはキム・シーの小さな家のほうに向かって走りました。

- PG 26: Now that the guards were in the garden, Kim Shee and Chang could escape. Someone else ran into the garden.
“My father is coming!” gasped Kim Shee.
警護たちが庭に集まったので、キム・シーとチャンは逃げ出すことができました。他の誰かが庭に駆け込んできました。
「父がやってきます！」キム・シーはハッとしたように言いました。
- PG 27: Kim and Chang began to run, but the guards saw them.
“Stop them!” shouted Kim Shee’s father.
Nadim and Chip threw the lemons at the guards.
キムとチャンは走り始めましたが、警護が彼らを見つけてしまいました。
「彼らを止めろ！」とキム・シーの父親が叫びました。
ナディムとチップは、警護に向かってレモンを投げました。
- PG 28: Chang and Kim Shee ran over the bridge. The guards chased after them.
Biff got ready.
“I hope Kim’s sash is strong!” she said.
The guards ran onto the bridge.
チャンとキム・シーは橋を駆け抜けました。警護は彼らを追いかけてました。ビフの準備はできていました。
「キムの腰帯が丈夫でありますように」と彼女は言いました。
警護が橋の上に駆け上がってきました。
- PG 29: Biff pulled the sash tight. The guards tripped over it.
They fell over with a crash.
“You fools!” shouted Kim Shee’s father.
ビフは腰帯をひっぱりました。警護はそれにつまずきました。
警護はドシンと音をたてて倒れこみました。
「まぬけめ！」とキム・シーの父親は叫びました。
- PG 30: Chip and Nadim climbed down from the lemon tree. They ran across to find Biff. Kim Shee’s father saw them.
“Catch those children,” he yelled.
チップとナディムはレモンの木から下りました。彼らはビフを見つけるために庭を横切って走りました。キムシーの父親が彼らに気がつきました。
「あの子どもたちを捕まえろ！」彼は大声を出しました。

- PG 31: “Well done, Biff!” said Chip. “Kim and Chang have got away!”
“I hope we get away, too,” said Biff. The magic key was glowing.
“Hooray! It’s time to go!” she said.
「良くやったね、ビフ」とチップが言いました。「キムとチャンは逃げる
ことができたよ！」
「私たちも逃げられますように」とビフは言いました。マジック・キーが光
っていました。
「よかった！行く時間よ！」彼女は言いました。
- PG 32: “What an adventure!” said Chip.
Nadim picked up his plate and looked at it.
“I wonder what happened in the real willow pattern story,” he said.
「すごい冒険だったね！」とチップが言いました。
ナディムはお皿を取り上げてじっと眺めました。
「本当の柳模様の物語では、何が起きたのだろう」とナディムは言いま
した。

Submarine Adventure 「潜水艦の冒険」

- PG 1: Wilf and Wilma had come to play at Biff and Chip's house. It was Wilf's birthday.
"Happy birthday, Wilf," said Biff and Chip.
They gave him a big card.
ウィルフとウィルマはビフとチップの家に遊びに来ていました。ウィルフの誕生日でした。
「お誕生日おめでとう、ウィルフ」ビフとチップは言いました。
彼らは彼に大きなカードを贈りました。
- PG 2: Wilf had a large box.
"This is my birthday present," he said.
Everyone looked inside the box.
"What is it?" asked Chip.
"It looks like a submarine," said Biff.
ウィルフは大きな箱を持っていました。「これは僕の誕生日プレゼントなんだ」とウィルフは言いました。みんなはその箱の内側を覗き込みました。「それは何？」チップが尋ねました。「潜水艦みたいだね」とビフは言いました。
- PG 3: "It's a kind of submarine," said Wilf. "It explores the sea bed."
"That's right," said Wilma. "It goes to the bottom of the sea."
"What a brilliant present!" said Biff.
「潜水艦の一種なんだ」とウィルフが言いました。「海底を探検するんだよ」
「その通り」ウィルマが言いました。「それは海底へ行くのよ」
「なんてすてきなプレゼントでしょう！」とビフは言いました。
- PG 4: The submarine looked like a car. It had big windows and it had headlights.
Wilf put the headlights on.
"It's brilliant," said Chip.
その潜水艦は車のように見えました。大きい窓とヘッドライトもありました。ウィルフはヘッドライトをつけました。「明るいね」とチップは言いました。
- PG 5: Biff looked at the magic key. Suddenly it began to glow. It was time for a new adventure.
"I wonder where the key will take us," said Wilf.

ビフがマジック・キーを見ました。突然それは光始めました。新しい冒険に出かける時でした。

「鍵は私たちをどこへ連れて行くのかな」ウィルフは言いました。

PG 6: The magic took the children to the sea, where there were lots of boats. Wilma pointed to a yellow submarine.

“Look at that one,” she said. “It looks just like Wilf’s submarine!”

魔法は子どもたちを海に連れて行きました。そして、そこにはたくさんの船がありました。

ウィルマは黄色の潜水艦を指差しました。「あの潜水艦を見て」とウィルマは言いました。「ウィルフの潜水艦そっくりだわ」

PG 7: The children went to look at the submarine.

“I wish we could look inside,” said Chip.

Just then a hatch began to open and a man looked out.

子どもたちはその潜水艦を見に行きました。

「中が見られたらなあ」とチップが言いました。

ちょうどその時、ハッチが開き始め一人の男の人が外を見ました。

PG 8: The man peered at them.

“Hello!” he said. “I’m Professor Tangle.”

“How do you do,” said Wilf.

“My new crew?” said Professor Tangle. “You look a bit young.”

その男の人は彼らをじっと見ました。

「こんにちは！ わしはタングル教授じゃ」

「はじめまして」とウィルフが言いました。

「わしの新しい乗組員じゃね？」とタングル教授は言いました。「少し若いようじゃが」

PG 9: “We’re not your new crew,” shouted Wilf. “How do you do!”

Professor Tangle didn’t hear properly. He got things muddled up.

“You know what to do?” he said.

「僕たちはあなたの新しい乗組員ではありませんよ」とウィルフは大きな声で言いました。「はじめまして」

タングル教授は、きちんと聞き取れませんでした。彼は物事をとりちがえてしまいました。

「君たちは何をすべきかわかっているね？」と彼は言いました。

PG 10: “That’s good! Get on board,” went on the Professor. “And tell me your names.”

“I’m Biff,” said Biff, “and this is Wilma. This is Wilf, and this is Chip.”

「それならけっこう！ 乗船しなさい」教授は続けて言いました。

「それから、君たちの名前を教えてくださいませ」
「私はビフです」とビフは言いました。「そしてこちらがウィルマ、こちらが
ウィルフ、そして、こちらがチップです」。

- PG 11: “No, it’s not a ship,” said the Professor. “It’s a diving machine.”
“We know that,” said Wilf.
“We’ve never been in one,” said Wilma, “and we’re not your new crew!”
「いや、それは船ではない*」と教授は言いました。「それは潜水用の機
械じゃ」
「わかってます」とウィルフが言いました。
「私たちは潜水艦には一度も乗ったことがありません」とウィルマが言い
ました。「それに、私たちはあなたの新しい乗組員でもないのよ！」
(*編集部注: Chip と ship をとりちがえている)
- PG 12: “You flew?” said Professor Tangle. “I didn’t see an aeroplane. Now shall
we go?”
Everyone smiled, and they all climbed into the submarine.
「君は飛んだのかい?*」とタングル教授は言いました。「飛行機は見な
かったがな。さて出かけようか」みんなは微笑んでいました。そして彼ら
はみんな潜水艦に上って、中に入りました。
(*編集部注: 「乗組員」= crew と「飛んだ」= flew, fly の過去形をとりにちが
えている)
- PG 13: Professor Tangle shut the hatch.
“There’s not much room,” said Wilma.
“No,” said Biff. “I hope it doesn’t leak.”
“Of course you can speak,” said the Professor.
タングル教授はハッチを閉めました。「あまり場所がないわね」とウィル
マが言いました。「ないね」とビフが言いました。「水漏れしませんように」
「もちろん君たちは話をしてよろしい*」と教授は言いました。
(*編集部注: 「漏れる」= leak と「話す」= speak をとりちがえている)
- PG 14: Professor Tangle started the engines.
“It’s time to dive,” he said.
The submarine went under the water.
“Glub! Glub! Glub” it went.
Everyone looked out of the window.
タングル教授はエンジンをスタートさせました。「潜る時間じゃ」と教授は
言いました。潜水艦は水中へ進みました。「ゴボ！ゴボ！ゴボ！」と音を
させながら進みました。みんなは窓から外を見ました。
- PG 15: They could see fish everywhere.

“It’s wonderful,” said Chip. “It’s amazing to be under the sea.”
“You can’t see?” said Professor Tangle. “Look out of the window, then.”
いたるところに魚が見えました。「すばらしい。海の中って驚くほど素敵
なんだね」とチップが言いました。
「見えないって？* それでは窓から見なさい」とタングル教授は言いま
した。

(*編集部注: under the sea と can’t see をとりちがえている)

PG 16: “Come on, crew!” said Professor Tangle. “Time to do some work. Push
that button, Biff. Press that handle, Wilf. Pull that lever, Chip.”
「さあ、乗組員諸君！」とタングル教授は言いました。「仕事をする時間
じゃよ。そのボタンを押して、ビフ。そのハンドルを握って、ウィルフ。そ
のレバーを引いて、チップ」

PG 17: “We’re not the crew!” yelled Biff. “Things might go wrong.”
“Sing a song?” said Professor Tangle. “There’s no time for that. There’s
far too much to do.”
「私たちは乗組員ではありません！」とビフが大きな声で言いました。
「間違いを起こしちゃうかもしれませんよ」
「歌を歌うだって？*」とタングル教授は言いました。
「そんな時間はない。しなければならぬ事がうんとたくさんあるのじゃ
よ」

(*編集部注: 「いろいろなこと」=thing と「歌う」=sing、「間違った」=
wrong と「歌」=song をとりちがえている)

PG 18: The submarine began to dive. It went deeper and deeper.
“Glub! Glub! Glub!” it went.
“Where are we heading?” shouted Chip. “Will we dive deep?”
潜水艦は潜り始めました。ますます深く進んでいました。
「ゴボ！ゴボ！ゴボ！」と音をさせながら進みました。
「僕たちはどこへ向かっているのですか？」とチップは大きな声で言
いました。「僕たちは深く潜るのですか？」

PG 19: “No, you can’t go to sleep,” said Professor Tangle. “You’re the crew! You
have to stay awake! We are going to dive deep.”
“This thing scares me,” said Wilma.
「いや、君たちは眠ってはだめじゃ*」とタングル教授は言いました。
「君たちは乗組員じゃ！目を覚ましていなければならないのじゃ。我々
は深く潜ることになっている」私は深く潜るなんて怖いわ」とウィルマは
言いました。

(*編集部注: 「深い」=deep と「眠る」=sleep をとりちがえている)

- PG 20: The submarine went deeper and deeper.
 “Glub! Glub! Glub!” it went.
 Everyone looked out of the window.
 “I can see a shark!” said Wilma.
 “It is getting dark,” said the Professor.
 潜水艦はますます深く潜って行った。
 「ゴボ！ゴボ！ゴボ！」と音をさせながら進みました。
 みんな窓から外を見ました。
 「サメが見える」とウィルマが言いました。
 「だんだん暗くなっているようじゃ*」と教授は言いました。
 (*編集部注:「サメ」=shark と「暗い」=dark をとりちがえている)
- PG 21: The submarine went even deeper. Professor Tangle was excited. It began to get dark.
 “It’s getting very dark,” said Biff. “Put the lights on, Professor.”
 潜水艦はさらに深く潜って行きました。タングル教授はワクワクしていました。
 辺りが暗くなり始めました。
 「とても暗くなってきています」とビフは言いました。「明かりをつけて下さい、教授」。
- PG 22: The Professor pushed the light switch.
 “Bother! The lights don’t work,” he said.
 Biff looked out of the window.
 “Oh no! Help! Professor Tangle! I can see huge rocks,” she called.
 教授は明かりのスイッチを入れました。
 「やれやれ！明かりがつかない」と教授は言いました。
 ビフは窓の外を見ました。
 「大変！助けて！タングル教授！ 巨大な岩があります！」ビフは叫びました。
- PG 23: “No, I don’t need clean socks,” said the Professor. “Now, where’s that fuse?” He began to look for his tool box.
 “Look out!” yelled Chip. “We’re going to crash!”
 「いや、私は清潔な靴下は必要ではない*」と教授は言いました。「さて、あのヒューズはどこにあるかな？」教授は道具箱を探し始めました。
 「気をつけて！衝突してしまいますよ！」と大声でチップが叫びました。
 (*編集部注:「巨大な岩が見える」=see huge rocks と「清潔なソックスが必要」=need clean socks をとりちがえている)
- PG 24: Professor Tangle pushed a button and he pulled a lever. The submarine didn’t crash. It just missed the rocks.

“Phew! That was close,” said Wilma.

タングル教授はボタンを押し、そしてレバーを引きました。潜水艦は衝突しませんでした。それはちょうど岩を回避しました。

「やれやれ！危機一髪だったわ」とウィルマは言いました。

- PG 25: There was a cave ahead of them. The submarine was heading for it.
“Slow down, Professor,” called Wilf. “We are heading for a cave in the rocks.”
彼らの前方には洞穴がありました。潜水艦はその方向に船首を向けていました。
「スピードを落としてください、教授」とウィルフが声をかけました。「僕たちは岩の中の洞穴に向かって前進しています」
- PG 26: “Yes, it was in the box,” said the Professor.
He held up the fuse.
“Professor, slow down!” yelled Wilf. “We’re going into a cave.”
「そうじゃ、その箱の中にあった*」と教授は言いました。
彼はヒューズを持ち上げた。
「教授、スピードを落として下さい」とウィルフは叫びました。「僕たちは洞穴の中に入りかけています」
(*編集部注:「岩」=rocks と「箱」=box をとりちがえている)
- PG 27: “Well, why didn’t you say so?” asked Professor Tangle. “We’d better slow down.”
He pulled a lever and the submarine slowed down just in time.
「そうじゃな、なぜ君は言わなかったんじゃ？」タングル教授は尋ねました。「我々はスピードを落としたほうがよろしい」
彼はレバーを引くと、潜水艦はスピードを落とすのにぎりぎり間に合いました。
- PG 28: The submarine went into the cave. Professor Tangle put the new fuse in. All the lights came on. The cave shone and sparkled. There were diamonds all over the walls.
潜水艦は洞穴の中に入って行きました。タングル教授は新しいヒューズを入れました。
すべての明かりがつかしました。洞穴は輝いてきらきら光っていました。壁中にダイヤモンドがありました。
- PG 29: “Diamonds! I’m rich!” said the Professor.
“But you can’t get at them,” said Biff.
“Oh bother!” said Professor Tangle. Suddenly the walls of the cave began to shake.

「ダイヤモンドじゃ！ わしは金持ちじゃ！」と教授は言いました。
「でも手に入れられないんじゃない」とビフが言いました。
「やれやれ」とタングル教授は言いました。突然、洞穴の壁が振動し始めました。

- PG 30: Rocks and stones fell all around them.
“We must get out,” said the Professor. “Full speed ahead.”
“Oh no! We aren’t going to make it,” said Wilma.
岩や石がみんなの周り中に落ちてきました。
「我々は逃げ出さなければ」と教授は言いました。「全速力で前進じゃ」
「なんてこと！ 無理だわ」とウィルマが言いました。
- PG 31: The submarine got out just in time.
“Phew! That was close!” said Biff.
“We’re sorry you couldn’t get the diamonds, Professor,” said Chip. Just then the key began to glow.
潜水艦はギリギリのタイミングで脱出することができました。
「やれやれ！ あれは危機一髪だったわ」とビフは言いました。
「ダイヤモンドを手に入れられなくて残念ですね、教授」とチップは言いました。ちょうどその時、鍵が光始めました。
- PG 32: The magic took them back to Biff’s room.
“That was a good adventure,” said Chip.
“We must go home for tea,” said Wilma.
“What’s that?” joked Wilf. “You want to go back to sea?”
魔法は彼らをビフの部屋に連れもどしました。
「よい冒険だったな」とチップは言いました。
「私たちはお茶の時間だから、家に帰らなくっちゃ」とウィルマは言いました。
「何だって？」ウィルフが冗談を言いました。「海に帰りたいの？*」
(*編集部注:「海」=Sea と「お茶」=tea の音が似ている)

Oxford Reading Tree Level 7 More Stories A

- ① The Motorway 「高速道路」
- ② The Joke Machine 「ジョーク・マシーン」
- ③ The Hunt for Gold 「金の採掘」
- ④ Roman Adventure 「ローマの冒険」

The Motorway 高速道路

- PG 1: Biff and Chip went to stay with Gran.
Gran lived in a little village.
Biff and Chip liked staying with Gran.
She was good fun.
She made Biff and Chip laugh.
ビフとチップはおばあちゃんの所へ泊まりに行った。
おばあちゃんは、小さな村に住んでいた。
ビフとチップは、おばあちゃんの所に泊まるのが好きだった。
おばあちゃんと一緒だと、楽しかった。
おばあちゃんはビフとチップを笑わせた。
- PG 2: Gran took Biff and Chip to the shed.
She had a surprise for them.
'Open the door,' she said.
'I've got a surprise for you.'
'What is it?' asked Chip.
おばあちゃんは、ビフとチップを物置に連れて行った。
二人にお楽しみがあった。
「ドアを開けてごらん」と、おばあちゃんが言った。
「二人にお楽しみがあるのよ」
「何なの？」と、チップが聞いた。
- PG 3: Biff and Chip opened the door and looked inside the shed.
They had a big surprise.
'Oh no!' said Biff.
'There's a dragon in the shed!'
ビフとチップはドアを開け、物置の中を見た。
二人はとっても驚いた。
「キヤー!」と、ビフが言った。
「物置に、龍がいる!」
- PG 4: 'It's not a real dragon,' said Gran.
'It's a kite.'
Biff and Chip looked at the kite.
'It's a Chinese dragon kite,' said Gran.
'It's wonderful,' said Biff.
「これは、本物の龍じゃないわ」と、おばあちゃんが言った。

「これは、凧よ」
ビフとチップは凧を見た。
「これは、中国の龍の凧よ」と、おばあちゃんが言った。
「すごいわ」と、ビフが言った。

- PG 5: The children wanted to fly the kite.
'It's a good day for a picnic,' said Gran.
'And it's a good day to fly the kite. It's quite windy.'
'Can I fly it first?' asked Biff.
子どもたちは凧を揚げたかった。
「今日はピクニックには、良い日ね」と、おばあちゃんが言った。
「それに、今日は凧を揚げるにも、良い日だわ。けっこう風があるから」
「私が最初に揚げてもいい？」と、ビフが聞いた。
- PG 6: Gran found a good place for the picnic.
It was near her house.
'This is a good place to fly the kite,' she said.
She let Biff fly the kite first.
おばあちゃんは、ピクニックにいい場所を見つけた。
そこは、家のすぐ近くだった。
「ここは凧を揚げるのに良い場所ね」と、おばあちゃんが言った。
おばあちゃんは、まずビフに凧を揚げさせた。
- PG 7: The wind took the kite up in the sky.
It went higher and higher.
'It looks wonderful,' said Chip.
Suddenly, the wind got stronger.
'Don't let go,' called Gran.
風が凧を空へ飛ばした。
それは、どンドン、上がって行った。
「かっこよく見えるな」と、チップが言った。
突然、風が強くなった。
「離しちゃダメよ」と、おばあちゃんが言った。
- PG 8: The wind pulled the dragon kite out of Biff's hand.
It blew away and landed in a tree.
Biff was upset.
'I couldn't hold on to it,' she said.
風で、龍の凧はビフの手から、飛んでいってしまった。
凧は飛ばされ、木に引っかかった

ビフは悲しかった。
「つかんでいられなかったの」と、ビフが言った。

- PG 9: Chip climbed the tree and pulled the kite, but it wouldn't come down.
'Be careful,' said Biff.
'Mind you don't tear it.'
'And mind you don't fall,' said Gran.
チップは、木に登って凧を引っ張った。でも、落ちて来なかった。
「気を付けて」と、ビフが言った。
「破らないように」
「それから、落ちないように」と、おばあちゃんが言った。
- PG 10: The kite was stuck in the tree.
Chip couldn't get it down.
In the end, someone got the kite down with a long pole.
'Thank you,' said Biff and Chip.
凧は木に引っかかって、動かなかった。
チップは下ろせなかった。
最後に知らない人が、凧を長い棒でとってくれた。
「ありがとう」と、ビフとチップが言った。
- PG 11: Biff and Chip went to fly the kite again.
Chip saw some wild flowers.
'Mind those flowers!' he said.
'Don't step on them.'
ビフとチップは、また、凧を揚げに行った。
チップは、野生の花を見つけた。
「花に気を付けて!」と、チップが言った。
「踏まないで」。
- PG 12: Gran looked upset.
'What's the matter, Gran?' asked Chip.
'They want to build a motorway.
They want to put it right here,' said Gran.
おばあちゃんは悲しそうに見えた。
「おばあちゃん、どうしたの?」と、チップが聞いた。
「高速道路を作りたがっている人がいるの。
ここに、作りたがっているの」と、おばあちゃんが言った。
- PG 13: Biff and Chip were upset, too.
They didn't want a motorway there.

'We won't be able to have picnics or play in the wood,' said Biff.
'And we won't be able to fly the kite.'
ビフとチップも悲しかった。
二人は、高速道路をそこに作って欲しくなかった。
「私たち、ピクニックも、森の中で遊ぶことも、できなくなる」と、
ビフが言った。
「凧も、揚げられなくなる」。

- PG 14: A woman pointed to the wood.
Then she pointed to the village.
'This is where the motorway will go.
It will go between the wood and the village,' she said.
女の人が、森を指さした。
そして、村を指さした。
「あそこに、高速道路が通る予定です。
森と村の間を通るのです」と、女の人が言った。
- PG 15: Gran was very upset.
She looked at the village and she looked at her house.
'We don't want a motorway here,' she said.
'We must stop it.'
おばあちゃんは、とても悲しかった。
おばあちゃんは、村を見て、自分の家を見た。
「私たち、ここに高速道路なんて欲しくないよ」と、おばあちゃん
が言った。
「止めなくちゃ」。
- PG 16: Gran told people in the village about the motorway.
Everyone was upset.
'We don't want a motorway here.
We must stop it,' they said.
おばあちゃんは、村の人たちに高速道路の話をした。
みんなが悲しがった。
「私たちは、ここに高速道路なんて欲しくない。
止めさせなくちゃいけない」。
- PG 17: Everyone wanted to stop the motorway.
'We don't want it here,' said Gran.
'It will spoil our village.'
'It can't be helped,' said a man.
'We can't stop it.'

みんな、高速道路を中止させたかった。
「私たちは、そんなもの欲しくない」と、おばあちゃんが言った。
「私たちの村を、だいなしにするわ」
「どうしようもないんだ」と、男の人が言った。
「私たちには、止められません」。

- PG 18: People came to Gran's house.
They made banners and posters.
Gran made a big banner.
Biff helped her.
The banner said, 'Stop the motorway'.
村の人たちが、おばあちゃんの家に来た。
みんなは旗やポスターを作った。
おばあちゃんは、大きな旗を作った。
ビフが手伝った。
旗は、「高速道路中止」と、書いてあった。
- PG 19: Chip was good at painting.
He made a poster.
The poster said, 'Save our woodland'.
'The banner looks good,' said Biff.
'And Chip's poster looks good too.'
チップは絵を描くのが上手だった。
チップはポスターを作った。
ポスターには「ぼくらの森を救おう」と、書いてあった。
「旗はなかなかよく見えるわ」と、ビフが言った。
「それに、チップのポスターも」。
- PG 20: Everyone went to a meeting.
An important woman was there.
The woman pointed to a map.
'We have to put the motorway here,' she said.
みんなは、集会に行った。
そこには、えらい女の人があった。
女の方は、地図を指さした。
「ここに高速道路を引かなければならないのです」と、言った。
- PG 21: 'We don't want the motorway here,' said Gran.
'It will spoil the village.'
'It can't be helped,' said the woman.
'It has to go somewhere. I can't stop it'

「私たちは、ここに高速道路は欲しくない」と、おばあちゃんが言った。
「村をだいなしにするわ」
「どうしようもないのです」と、女の人が出た。
「どこかに、引かなければならないのです。私には、止められません」。

- PG 22: Soon, big lorries and bulldozers came to the village.
Nobody wanted the motorway.
Everyone wanted to stop it, but the bulldozers began to dig.
少したつと、大きなトラックやブルドーザーが村にやって来た。
誰ひとり、高速道路なんて欲しくなかった。
みんなが止めたかった、でも、ブルドーザーが地面を掘り始めた。
- PG 23: Gran looked at the bulldozers.
'The motorway will spoil the countryside,' she said.
'Now we won't be able to walk in the woods and go on picnics.'
おばあちゃんはブルドーザーを見た。
「高速道路は、田園をだいなしにする」と、おばあちゃんが言った。
「もう、森の中を歩くことも、ピクニックもできなくなる」。
- PG 24: The children watched the bulldozers.
Biff looked at the wild flowers.
'Oh no!' she said.
'The bulldozer will dig them up soon.
Let's pick some for Gran.'
子どもたちはブルドーザーを見た。
ビフは野生の花を見た。
「どうしよう!」と、ビフが出た。
「ブルドーザーが、もうすぐこの花を、掘り起こしてしまう。
おばあちゃんに摘んで行こう」。
- PG 25: Biff and Chip made Gran a cup of tea.
They gave her the flowers.
'We picked these flowers for you,' said Chip.
'The bulldozer will dig them up soon.'
ビフとチップは、おばあちゃんにお茶を入れた。
二人は、花をあげた。
「ぼくたち、この花をおばあちゃんに摘んだんだ」と、チップが出た。

「ブルドーザーがもうすぐ、花を掘り起こしちゃうんだ」。

- PG 26: Gran looked at the flowers.
'I think these flowers are very rare,' she said.
'I've never seen them before.'
She jumped up and ran inside the house.
おばあちゃんが花を見た。
「この花は、とても珍しいと思うわ」と、おばあちゃんが言った。
「今までに、見たことがない」
おばあちゃんは飛び上がって、家の中へ走り込んだ。
- PG 27: Gran looked in a book.
She found a picture of the flowers.
'This is wonderful!' shouted Gran.
'These flowers are rare.'
Now we can stop the motorway.'
おばあちゃんは本を見た。
花の写真を見つけた。
「これは、素晴らしい!」と、おばあちゃんが叫んだ。
「この花は、本当に珍しい。これで、高速道路を止められるよ」。
- PG 28: People came from everywhere.
They looked at the rare flowers.
'This is amazing,' they said.
'We've never seen these flowers before.'
They must be saved.'
人々が、そこらじゅうからやって来た。
みんなは、その珍しい花を見た。
「これは、すばらしい」と、みんなが言った。
「今までこんな花を見たことがない。
これは、保存すべきだ」。
- PG 29: 'Hooray!' shouted Gran.
'These flowers will stop the motorway.'
They can't put a motorway here.
They can't dig up rare flowers.'
「やった!」と、おばあちゃんが叫んだ
「その花が、高速道路を止めてくれるわ。
ここには、高速道路を引けなくなる。
この珍しい花を掘りおこす事はできないのよ」。

- PG 30: The rare flowers were saved, and so was Gran's village.
The bulldozers and lorries went away,
but they left a big hole in the ground.
その珍しい花も、おばあちゃんの村も、救われた。
ブルドーザーとトラックが去って行った。
でも、大きな穴を地面に残していった。
- PG 31: 'Thank you for helping us stop the motorway,' said Gran.
'What will you do about the hole?' asked Biff.
Gran smiled. She had an idea.
「高速道路を止めるのを助けてくれて、ありがとう」と、
おばあちゃんが言った。
「穴は、どうするの?」と、ビフが聞いた。
おばあちゃんが微笑んだ。ある考えがあったのだ。
- PG 32: The big hole was made into a lake.
Ducks came to live on it and wild flowers grew round it.
'The children will like this,' said Gran.
'It's better than a motorway.'
大きな穴は湖になった。
アヒルが住みに来て、野生の花が周りに育った。
「子どものたちはこれが気に入るよ」と、おばあちゃんが言った。
「高速道路より、ずっといいもの」。

The Joke Machine ジョークマシーン

- PG 1: Everyone was in the playground.
"I've got a good joke," said Wilf. "What goes black, white, black, white?"
"I don't know," said Biff.
"A penguin rolling down a hill!" said Wilf.
みんなは校庭にいました。「僕、面白い冗談を知ってるよ」とウィルフが
言いました。「黒、白、黒、白になるものな一に？」
「わからない」とビフが言いました。
「丘をころげ落ちるペンギンだよ」とウィルフは言いました。
- PG 2: "I've got one," said Anneena. "Why couldn't the skeleton go to the party?"
"Why couldn't the skeleton go to the party?" asked Chip.
"It had *no body* to go with!" said Anneena.
「私もひとつ知ってるわ」とアニーナが言いました。「なぜ骸骨はパーティーに行けなかったのでしょうか？」
「なぜ骸骨はパーティーに行けなかったのでしょうかだって？」とチップが尋ねました。「一緒に行く人が誰もいなかったから*」とアニーナは言いました。
(*編集部注: no body に、「骨だけで身体がない」と「誰もいない」の二つの意味をかけている)
- PG 3: "Time to come inside!" called Mrs May. "Line up quietly, everyone."
"What do sea monsters eat?" said Nadim. "Fish and ships!"
"That's a terrible joke!" said Biff.
「もう中に入る時間ですよ！」メイ先生が呼びました。「みんな静かに並んで」
「海の怪物は何を食べるでしょう？」ナディムが言いました。
「魚と船！*」
「それはひどい冗談だわ」とビフは言いました。
(*編集部注: 英国の代表的料理のひとつである fish and chips に、ことばの響きが近い fish and ships をかけたことば遊び)
- PG 4: "Get in, you chatterboxes," said Mrs May. "Didn't you hear the whistle?"
"Sorry, Mrs May," said Wilf. "We were telling jokes."
"Well, it's time to stop now," said Mrs May.
「中へお入りなさい、あなたたちおしゃべりさん」とメイ先生が言いました。
「笛の音が聞こえませんでしたか？」「すみません、メイ先生、僕たち冗談

を言い合ってたんです」「ではもう止める時間ですよ」とメイ先生は言いました。

PG 5: “Mrs May!” called Biff. “What does an elephant do on a motorway?”
“Not now, Biff,” said Mrs May. “Tell me later. In you go everyone.”
「メイ先生！」とビフが呼びかけました。「ゾウは高速道路で何をするでしょう？」
「今はだめです、ビフ。あとでちょうだね。みんな中に入って」とメイ先生は言いました。

PG 6: “Biff,” whispered Nadim. “What does an elephant do on a motorway?”
“About two miles an hour!” said Biff.
“Biff! Nadim!” said Mrs May. “Go inside quietly!”
「ビフ」とナディムがささやきました。「ゾウは高速道路で何をするでしょう？*」
「1時間に約2マイル！」とビフは言いました。
「ビフ、ナディム！」メイ先生が言いました。「静かに中に入りなさい」
(*編集部注: What does ~do という言い方には「何をするか」という意味以外に、「どんな速さか」という意味がある。ゾウが何をするかをとれる質問に、スピードについての答えをしたところが意外でおもしろい。)

PG 7: It was nearly time to go home.
“Well done!” said Mrs May. “You have worked hard today. Now it’s time to tidy up.”
そろそろ家に帰る時間でした。
「よくできました」とメイ先生は言いました。「今日はよく勉強しましたね。さあ、お片づけの時間です」とメイ先生は言いました。

PG 8: “Mrs May!” called Anneena. “Do you want to hear one of Nadim’s jokes?”
“Well, just one,” said Mrs May. “I want to get home tonight.”
「メイ先生！」とアニーナが呼びかけました。「ナディムの冗談を一つ聞きたくありませんか？」
「そうね、ひとつだけ。私は今晚家に帰りたいから」とメイ先生は言いました。

PG 9: “Why do cows wear bells?” asked Nadim.
“I don’t know,” said Mrs May. “Why do cows wear bells?”
“Because their horns don’t work!”
「なぜ牛は鐘(ベル)をつけているのでしょうか？」とナディムが聞きました。
「わからないわ」とメイ先生は言いました。「なぜ牛は鐘をつけているの？」
「彼らの角は役に立たないからです*」とナディムは言いました。

(*編集部注: horn には動物の角と警笛のふたつの意味がある)

- PG 10: Mrs May clapped her hands.
"I want to ask you something," she said. "Who knows about *Help the Children Day*?"
"There's a special day," said Chip.
"People raise money to help children," said Wilf.
メイ先生は手を叩きました。「あなたたちに聞きたいことがあるわ」とメイ先生は言いました。「『子どもたちを救済する日』について知っている人は誰？」
「特別な日です」とチップが言いました。「人々は子どもたちの救済のために寄付金を集めます」とウィルフが言いました。
- PG 11: "How could we raise money for *Help the Children Day*?" asked Mrs May.
"We'll have to think hard," said Anneena.
"Tell me your ideas tomorrow," said Mrs May.
「どうすれば『子どもたちを救済する日』のために寄付金を集められるでしょう？」とメイ先生は尋ねました。
「私たち、よく考えなくちゃ」アニーナは言いました。
「あなたたちの考えを明日聞かせて下さい」メイ先生は言いました。
- PG 12: Everyone was at Biff and Chip's house.
"I can't think of anything," said Chip.
"Nor can I," said Anneena.
"What ideas have we had so far?" asked Biff. "Read out the list, Nadim."
みんなはビフとチップの家に行きました。「僕は何も思いつかない」とチップは言いました。「私もよ」とアニーナが言いました。「今までに考えたことって何？」とビフが尋ねました。「そのリストを読み上げてちょうだい、ナディム」。
- PG 13: Nadim read out the list. "Ideas for *Help the Children Day*. Washing cars, toy sale."
"That's only two ideas!" said Anneena.
"Well, we've only had two ideas," said Wilf.
ナディムはリストを読み上げました。「『子どもたちを救済する日』のための考え。洗車、おもちゃのセール」「たった二つだけね！」とアニーナは言いました。「さて、僕たちは二つしか思いつきませんでした」とウィルフは言いました。
- PG 14: "I don't think washing cars is a good idea," said Chip. "I don't think Mrs May would let us."

"And I gave all my old toys to the last toy sale," said Wilf.

「洗車はよい考えじゃないな」とチップは言いました。「僕はメイ先生はやらせてくれないと思うな」

「それに僕は前回のおもちゃのセールの際に、古いおもちゃは全部あげてしまった」とウィルフは言いました。

PG 15: Then Nadim had a good idea.

"What about a joke machine?" he said. He told them all about his idea. Everyone was excited.

"I can't wait to tell Mrs May," said Chip.

その時、ナディムが良い考えを思いつきました。「冗談の機械ってどう？」彼は言いました。彼は自分の考えについて全部話した。みんなはワクワクした。「メイ先生に話すのが待ちきれない」とチップは言いました。

PG 16: The next day, they were back at school.

"Mrs May!" called Anneena. "We've got an idea for *Help the Children Day!*"

"It must be a good one," said Mrs May. "You all sound excited."

その次の日、彼らは学校にもどって来ました。「メイ先生！」とアニーナが呼びかけた。「私たち、子どもたちを救済する日のためにある考えを思いつきました」「それはきっとよい考えにちがいないわね。あなたたち、みんなワクワクした声ですもの」とメイ先生は言いました。

PG 17: They told Mrs May what the idea was.

"It's a joke machine!" said Biff.

"We write jokes on slips of paper," said Chip. "Then we put the jokes in a box."

"The box is the joke machine," said Wilf.

彼らはメイ先生にその考えを話しました。「それは冗談の機械です！」とビフが言いました。「僕たちが細い紙に冗談を書きます」とチップは言いました。「それから僕たちはその冗談を箱の中に入れます」「その箱が冗談の機械なのです」とウィルフは言いました。

PG 18: "It's a great idea!" said Anneena. "People pay for a joke!"

"They give some money," said Wilf. "Then they get a joke from the box."

「すばらしい考えなんです！」アニーナが言いました。「人々は冗談と引き換えにお金を払うんです！」「人々はいくらかのお金を出します」とウィルフが言いました。「すると、箱の中から冗談をひとつ取り出せるんです」

- PG 19: "I think it's a lovely idea," said Mrs May. "But I can see one problem."
 "What 's that?" everyone asked.
 "You will need lots and lots of jokes," said Mrs May.
 「それはすてきな考えだと思います」とメイ先生は言いました。「でもひとつ問題があると思うわ」
 「それは何ですか？」とみんなが尋ねました。
 「とてもとても、たくさんのお話が必要になりますね」とメイ先生は言いました。
- PG 20: The joke machine was finished.
 "It's brilliant!" said Chip. "Look! I've finished the poster,"
 "A laugh does you good," read Wilf.
 "Do good with a laugh."
 冗談の機械が出来上がりました。
 「見事だね！」とチップは言いました。「見て！ 僕はポスターを完成したよ」
 「笑いはあなたをよい子にします」とウィルフが読みました。「笑ってよい事をしよう」。
- PG 21: "We have put the jokes on the computer, now we can print them off," said Nadim. "And here's the next one: What game do horses play?"
 "Stable tennis!" laughed Anneena.
 「冗談をコンピューターに入力したので、もう打ち出すことができるよ」とナディムは言いました。「それから、次のはこれ。『馬はどんなゲームをするでしょう？』」
 「馬小屋テニス！*」アニーナは笑いました。
 (*編集部注・卓球=table tennisと似た音の stable(馬小屋)tennisをかけている)
- PG 22: "How many jokes have we got?" asked Wilf.
 "Forty-nine," said Nadim. "I wish we had some more."
 "Here is one more for you," said Mrs May. "What can fly and has four legs?"
 「僕たちいくつ冗談を作ったかな？」とウィルフが尋ねました。
 「49」とナディムが言いました。「もう少しあったらいいね」
 「あなたたちのために、もうひとつあります」とメイ先生が言いました。
 「飛ぶことができて 4 本足のものはなに？」
- PG 23: "We don't know!" they all said. "What can fly and has four legs?"
 "Two birds!" said Mrs May. Everyone laughed.
 「わかりません！ 飛ぶことができて 4 本足のもの？」とみんなが言いま

した。「2羽の鳥です！」とメイ先生は言いました。みんなが笑いました。

- PG 24: They took the joke machine to the shopping center.
“Roll up! Roll up!” they shouted.
“Support the children! Buy a joke for 50p or more!”
みんなは、冗談の機械をショッピングセンターへ持っていきました。
「いらっしやい！ いらっしやい！」と大きな声で言いました。
「子どもたちを支援してください！ 50ペンス以上で冗談を買ってください！」
- PG 25: A man came up to buy a joke.
“He’s given us a pound!” called Chip.
“Thank you, very much.”
The man wanted them all to tell the joke. So they told it together.
一人の男の人が冗談を買いに来ました。
「彼は僕たちに1ポンド払ってくれたよ！ どうもありがとうございます」とチップは言いました。
その男の人は冗談をみんなで言ってほしいと言いました。そこでみんなでその冗談を言いました。
- PG 26: “What has only one foot?” they all said.
“I don’t know,” said the man. “What has only one foot?”
“A leg!” they said.
Everyone laughed.
「足がひとつしかないものなーに？」彼らみんなで言いました。
「分からないなあ」と、その男の人は言いました。「足がひとつしかないもの？」
「1本の脚です！」と彼らは言いました。みんな笑いました。
- PG 27: “I have some good news,” said Mrs May. “The mayor loves your joke machine. She wants to buy all your jokes! Guess how much she will pay for each one?”
「よい知らせがあります」とメイ先生が言いました。「市長さんがあなたたちの冗談の機械が気に入ったの。彼女はあなたたちの冗談を全部買いたいそうです！ 冗談ひとつにつき、彼女がいくら払ってくださるか当ててみて？」
- PG 28: “We don’t know,” said everyone. “How much will she pay for each one?”
“Two pounds!” said Mrs May.
“Fifty jokes at two pounds each!” said Nadim. “That’s a hundred pounds!”

「わからない。冗談ひとつにつき、いくら払うかなんて」とみんなは言いました。
「2ポンドです！」とメイ先生は言いました。
「ひとつ2ポンドで50個の冗談！ つまり100ポンドです！」とナディムが言いました。

- PG 29: “But we’ve sold twenty jokes,” said Wilf. “There are only thirty left.”
“I’ve been putting them back,” said Nadim. “There are still fifty in there.”
「でも僕たちもう20個の冗談を売ってしまった。あと30個しか残っていないよ」とウィルフが言いました。
「僕がその分を戻したよ。その中にはまだ50個入ってる」とナディムは言いました。
- PG 30: “Three cheers for Nadim!” said Anneena. “It was his brilliant idea!”
“And three cheers for the joke machine!” said Mrs May.
「喝采を3回ナディムに！ *」とアニーナが言いました。「彼の思いつきさえてるわ！」
「そして冗談の機械に3回の喝采を！」とメイ先生が言いました。
(*編集部注: three cheers とは、何か、誰かを称えて同じセリフを3回繰り返し返し唱えること。“Hip, hip, hooray!”と唱える場合が多い)
- PG 31: “I’ve thought of another joke,” said Nadim. “What card game do crocodiles like?”
“We don’t know,” they all said. “What card game do crocodiles like?”
「僕、別の冗談を思いついたよ」とナディムが言いました。「ワニの好きなカードゲームは何でしょう？」
「わからない。ワニはどんなカード遊びが好きなの」と彼らみんなが聞きました。
- PG 32: “Snap!” said Nadim. Everyone groaned.
「スナップさ！」とナディムは言いました。みんなは(感心して)うなりました。
(*編集部注: どうもうなワニが「かみつく」意味とトランプ遊びのひとつである「スナップ」をかけている)

The Hunt for Gold 金の発掘

- PG 1: Wilma's mum had a charm bracelet.
It was made of gold.
The bracelet had ten charms on it.
The charms were made of gold too.
'It's a beautiful bracelet,' said Chip.
ウィルマのママは、飾りのついた腕輪を持っていた。
それは、金で出来ていた。
腕輪には、十個の飾りがついていた。
その飾りも、金で出来ていた。
「それは、きれいな腕輪だね」と、チップが言った。
- PG 2: Wilma's mum was washing her hands at the sink.
She had the bracelet on.
One of the charms fell off the bracelet, and it went down the plug hole.
ウィルマのママは、流しで手を洗っていた。
ママは、腕輪をしていた。
飾りが一つ、腕輪から落ちて、流しの穴に落ちてしまった。
- PG 3: Wilma's mum was very upset.
'I hope I can get the charm out of the plug hole,' she said.
Chip ran and got his mum.
'She can get the charm out,' he said.
ウィルマのママはとても悲しかった
「飾りを穴から取れると、いいのだけどね」と、ママが言った。
チップが、チップのママを呼びに走った。
「ぼくのママが、飾りを取り出せるよ」と、チップが言った。
- PG 4: Mum put a plastic bowl under the sink.
Everyone looked in the bowl.
'There's the charm,' said Mum.
'Yuk!' said Wilma. 'It's got dirt on it.'
Wilma's mum was glad to get it back.
ママがプラスチックの容器を流しの下に置いた。
みんなが、容器の中を見た。
「ここに、飾りがあったわ」と、ママが言った。
「気持ち悪い!」と、ウィルマが言った。「ごみがついてるわ」
ウィルマのママは、飾りが戻ってきて、嬉しかった。

- PG 5: Mum found something else.
'Yuk!' she said. 'Look what I've found.'
It was Wilf's old chewing gum.
'What a place to stick old chewing gum!' said Wilma's mum.
ママが、別の物を見つけた。
「ウエ!」と、言った。「私が見つけたものを見て」
それは、ウィルフの古いガムだった。
「なんて所に、古いガムがくっついたのかしら!」と、
ウィルマのママが言った。
- PG 6: The children went to Biff's bedroom.
Wilf had three packets of chewing gum.
He gave some gum to Chip.
'This is my bedroom,' said Biff, 'so mind where you put the old
chewing gum.'
子どもたちはビフの寝室にいた。
ウィルフは、ガムを3パック持っていた。
ウィルフは、少し、チップにあげた。
「ここは、私の寝室よ」と、ビフが言った。「だから、ガムの
かみかすの置き場所には、気を付けてよね」。
- PG 7: Suddenly, the magic key began to glow.
The magic took the children on a new adventure.
'Help!' said Wilf. 'I don't know what to do with my old chewing
gum.'
突然、魔法の鍵が光り始めた。
魔法は、子どもたちを新しい冒険へ連れて行った。
「助けて!」と、ウィルフが言った。「ぼく、かみかけの古いガム
をどうすればいいのか、わからないよ」。
- PG 8: The magic took the children back in time.
It took them to a river.
A boy and a girl were looking for something in the water.
魔法は子どもたちを、昔へ連れて行った。
みんなを、川へ連れて行った。
男の子と女の子が、川の中で何かを探していた。
- PG 9: The boy and the girl had big pans.
They scooped up little stones from the river.
Then they looked for tiny bits of gold in the bottom of the pans.

男の子と女の子は、大きな平鍋を持っていた。
二人は、川からじゃりをすくい上げた。
そして、二人は平鍋の底の中の、金のかけらを探した。

- PG 10: The boy and girl got angry, when they saw the children.
They didn't want them to look for gold.
'This is our bit of river,' they shouted.
'Go and look for gold somewhere else!'
男の子と女の子は、子どもたちを見て、怒った。
二人は、みんなに金を探して欲しくなかった。
「ここは、ぼくらのなわばりの川だ」と、二人は叫んだ。
「どっか違う所に、金を探しに行つてよ」。
- PG 11: Wilf gave the boy and girl some gum.
They hadn't seen chewing gum before.
They didn't know what to do with it.
'You just chew it,' said Wilf.
'Chew it, but don't swallow it.'
ウィルフは、その男の子と女の子にガムをあげた。
二人は、今までに、ガムを見た事がなかった。
二人は、それをどうすれば良いのかわからなかった。
「噛むだけだ」と、ウィルフが言った。
「噛んで、でも、飲み込まないで」。
- PG 12: The boy was called Luke and the girl was called Alice.
They lived in a hut by the river.
Alice and Luke looked for gold every day.
It was a hard life.
男の子はルークという名で、女の子はアリスという名前だった。
二人は、川の近くの小屋に住んでいた。
アリスとルークは、毎日、金を探していた。
それは、つらい生活だった。
- PG 13: The family hadn't found any gold, and Luke and Alice were always hungry.
'Looking for gold is hard,' said Luke.
'Do you want to help us?'
その家族は、まだ全く金を見つけたことがなかった。
そして、ルークとアリスはいつもお腹をすかしていた。
「金を探すのは、大変なんだ」と、ルークが言った。
「僕たちを、助けてくれるかい？」

- PG 14: The children helped look for gold.
Wilf and Biff helped Luke's father.
Wilma and Chip helped Alice and Luke.
'I'm glad I brought the gum,' said Wilf.
'This is hard work.'
子どもたちは金を探すのを手伝った。
ウィルフとビフは、ルークのお父さんを手伝った。
ウィルマとチップは、アリスとルークを手伝った。
「ガムを持ってきてよかったよ」と、ウィルフが言った。
「これは、大変な仕事だ」。
- PG 15: It was cold in the river, and the children soon got tired.
'We do this every day,' said Luke, 'and we still haven't found any gold.'
川の中は、冷たかった。そして、しばらくすると、子どもたちは
疲れてしまった。
「僕らは、毎日こうしてるんだ」と、ルークが言った。「それなのに、
まだ、金が見つからないんだ」。
- PG 16: Suddenly, Luke's father shouted.
'Gold!' he yelled. 'We've found gold.'
He picked up a big nugget of gold and jumped up and down.
Everyone ran to see.
突然、ルークのお父さんが叫んだ。
「金だ！」と、お父さんが叫んだ。「私たちは、金を見つけたんだ」
お父さんは、大きな金の塊を取って、跳びはねた。
みんなが見に、駆け寄った。
- PG 17: Everyone looked at the gold nugget.
It felt heavy and cold.
'Hooray!' shouted Luke's mother.
'We have found gold at last,' she said. 'I thought we'd never find
any.'
みんなは、その金の塊を見た。
それは、重くて、冷たく感じた。
「やったわ！」と、ルークのお母さんが叫んだ。
「やっと、私たち、金を見つけたのよ」と、お母さんが言った。
「もうぜったい、見つけられないと思っていたわ」。
- PG 18: The children went to town with Luke's mother and father.
Luke and Alice were excited.
'We can sell the gold,' they said, 'and we can buy some food.'

子どもたちは、ルークの両親といっしょに町へ行った。
ルークとアリスは、とても楽しみにしていた。
「僕らは、金を売るんだ」と、二人は言った。
「そして、食べ物を買うんだ」。

- PG 19: 'We can buy new clothes,' said Luke's mother.
'And a new spade,' said Luke's father.
'And some chewing gum,' said Luke.
'What's chewing gum?' asked Luke's father.
「新しい服も買えるわ」と、ルークのお母さんが言った。
「それに、新しいシャベル」と、ルークのお父さんが言った。
「それに、ガムも」と、ルークが言った。
「ガムってなんだい？」と、ルークのお父さんが聞いた。
- PG 20: Some men were waiting in the road.
'Oh no!' said Luke's father. 'Robbers!'
'They will steal our gold nugget. What shall we do?'
男たちが、道で待ち伏せをしていた。
「どうしよう！」と、ルークのお父さんが言った。「泥棒だ！」
「あいつらは、私たちの金の塊を盗んでしまう。どうすればいいんだ？」
- PG 21: Wilf had an idea.
He spoke to all the children.
'Give me your chewing gum,' he said.
'Give me all the old chewing gum, and give me the gold nugget.'
ウィルフには、考えがあった。
ウィルフは、子どもたち皆に話しかけた。
「僕にかみかけのガムを頂戴」と、ウィルフが言った。
「僕にかみかけのガム、全部頂戴。それとその金の塊も」。
- PG 22: The robbers wanted gold and money.
'But we're just a poor family,' said Luke's father.
'We haven't got any money and we haven't found any gold.'
泥棒たちは、金とお金が欲しかった。
「でも、私たちは貧しい家族です」と、ルークのお父さんが言った。
「お金は持っていないし、金も見つかっていない」。
- PG 23: The robbers looked everywhere.
They searched everyone.

'We're only children,' said Alice.
'We haven't got any gold and we haven't got any money.'
泥棒は、すみずみまで探し回った。
泥棒は、みんなを調べた。
「私たち、ただの子どもよ」と、アリスが言った。
「私たちは、金も、お金も、持っていないわ」。

PG 24: The robbers couldn't find the gold.
They let everyone go.
'Hooray,' said Luke.
'Wilf's chewing gum saved the gold.'
'Is that chewing gum?' asked Luke's father.
泥棒は、金を見つけられなかった。
泥棒は、みんなを見逃した。
「やった！」と、ルークが言った。
「ウィルフのガムが、金を救ったんだ」
「それが、ガムなのか？」と、ルークのお父さんが言った。

PG 25: Luke's father and mother got some money for the gold.
'I can have a new dress,' said Alice.
'And I can have new boots,' said Luke.
ルークのお父さんとお母さんは、金をお金に替えた。
「新しいワンピースが買ってもらえるわ」と、アリスが言った。
「僕も、新しいブーツが買ってもらえる」と、ルークが言った。

PG 26: Luke's father bought a new cart.
It was bigger than the old one.
'We need a new cart,' said Luke.
'There is so much to take home.'
ルークのお父さんは、新しい荷車を買った。
それは、古いのよりも大きかった。
「新しい荷車がいるんだ」と、ルークが言った。
「たくさん、家にもって帰るんだ」。

PG 27: The children helped them put everything on the cart.
'This is hard work too,' said Biff.
'These magic adventures are not all fun.'
子どもたちは、荷車に物を積みこむのを手伝った。
「これも、大変な仕事だわ」と、ビフが言った。
「魔法の冒険は、全部が楽しいわけじゃないのね」。

- PG 28: They all went back to the river.
The family put on the new clothes.
Wilma and Biff looked for gold.
'I hope we find some,' said Wilma.
'I'd love to find a gold nugget.'
みんなは川に戻った。
家族は、新しい服を着た。
ウィルマとビフは、金を探した。
「見つかるといいわ」と、ウィルマが言った。
「金の塊が見つければ、すごく嬉しいわ」。
- PG 29: Suddenly, Biff saw a little yellow speck in the pan.
She had found some gold.
'It's very small,' she said.
Just then, the magic key began to glow.
その時、ビフが、小さな黄色の粒が平鍋の中にあるのに
気付いた。
ビフは、金を見つけたのだ。
「これは、とても小さいわ」と、ビフが言った。
その時、魔法の鍵が光り始めた。
- PG 30: The magic took the children home.
Biff looked at the gold.
'It looks really tiny, now,' she said.
'It looks like a speck of dust!'
Suddenly, Chip sneezed.
魔法は子どもたちを家へ連れて行った。
ビフが、金を見た。
「もう、本当に小さく見える」と、ビフが言った。
「ほこりのかけらみたいに見える！」
突然、チップがくしゃみをした。
- PG 31: The speck of gold blew out of Biff's hand.
It blew on to the carpet.
'Did you see where it went?' asked Biff.
'Oh no! Sorry!' said Chip.

金のかけらは、ビフの手から飛ばされた。
カーペットの上に飛び落ちた。
「どこに行ったか、見てた？」と、ビフが聞いた。
「しまった！ ごめんよ！」と、チップが言った。

PG 32: The children looked and looked.
They couldn't find the little speck of gold.
'I don't think we ever will,' said Biff.
'Oh no!' said everyone.
子どもたちは、探し続けた。
みんなは、小さな金のかげらを見つけられなかった。
「私たち、もう見つけられないと思うわ」と、ビフが言った。
「あ～あ！」と、みんなが言った。

Roman Adventure ローマの冒険

- PG 1: Biff and Chip were doing a project on the Romans.
The project was for Mrs May.
Biff made a chariot and Chip drew a picture.
ビフとチップは、ローマ人の課題研究をしていた。
課題は、メイ先生から与えられたものだった。
ビフは、二輪戦闘車を作り、チップは絵を描いた。
- PG 2: Mum and Dad looked at the project.
'The Romans were interesting,' said Biff.
Chip showed Mum his picture.
It was a picture of a Roman chariot.
The chariot was pulled by four horses.
ママとパパは課題を見た。
「ローマ人は、興味深い人たちだったのね」と、ビフが言った。
チップは、ママに絵を見せた。
それは、古代ローマの二輪戦闘車の絵だった。
戦闘車は、四頭の馬に引かれていた。
- PG 3: Biff showed Dad the model.
'The Romans had chariot races,' said Biff.
'The races were dangerous.
A chariot was so heavy, it needed four horses to pull it.'
ビフはパパに模型を見せた。
「ローマ人たちは、二輪戦闘車のレースをしたの」と、ビフが言った。
「レースは危なかった。
戦闘車はとても重くて、引くのに四頭の馬が必要だったのよ」。
- PG 4: Mum and Dad played a joke on Biff and Chip.
They dressed up as Romans.
'It's time for supper,' called Dad.
ママとパパは、ビフとチップをからかった。
二人は、ローマ人のように着飾った。
「夕飯の時間です」と、パパが呼んだ。
- PG 5: Kipper had some pizza and Mum had some grapes.
'This is a Roman supper,' said Mum.

'Romans didn't have pizzas,' laughed Biff.

'How do you know?' asked Mum.

キッパーはピザを持っていて、ママはぶどうを持っていた。

「これは、ローマ人の夕食よ」と、ママが言った。

「ローマ人は、ピザを食べなかったわ」と、ビフが言った。

「証拠があるの?」と、ママが聞いた。

PG 6: Biff and Chip went to Biff's room.

Biff wanted to take the chariot to school,

But she still had to paint it.

Chip was good at painting, so he helped Biff.

ビフとチップは、ビフの部屋へ行った。

ビフは、戦闘車を学校へ持っていきかけた。

けれど、まだそれを塗らなければならなかった。

チップは塗るのが得意だったから、ビフを手伝った。

PG 7: Suddenly, the magic key began to glow.

The magic took Biff and Chip on a new adventure.

'Oh no!' said Biff.

'I'm still painting the model chariot.'

突然、魔法の鍵が光り始めた。

魔法は、ビフとチップを新しい冒険へ連れて行った。

「どうしよう!」と、ビフが言った。

「私は、まだ戦闘車の模型を塗っているのに」。

PG 8: The magic took the children back to Roman times.

It took them to Rome.

Biff and Chip saw a girl.

She was playing in the street.

魔法は、子どもたちを古代ローマ時代へ連れて行った。

二人を、ローマへと連れて行った。

ビフとチップは女の子を見た。

その子は、道で遊んでいた。

PG 9: The girl looked at Biff's model.

'It's a good model,' she said, 'but it doesn't look quite right'

'We've never seen a real chariot,' said Biff.

女の子は、ビフの模型を見た。

「よくできた模型だわ」と、女の子が言った。「でも、本物

そっくりには見えないわ」

「私たちは、本物の戦闘車を見たことがないの」と、ビフが言った。

- PG 10: The Roman girl was called Diana.
She had a brother called Mark.
He was a chariot driver.
Mark looked at Biff's model chariot.
'I can show you a real chariot,' he said.
そのローマ人の女の子は、ダイアナという名前だった。
女の子には、マークというお兄さんがいた。
彼は、戦闘車の騎手だった。
マークは、ビフの模型を見た。
「僕が、本物の戦闘車を見せてあげるよ」と、マークが言った。
- PG 11: Mark opened some big doors.
Inside was a real chariot.
It was like Biff's model, but it was very big.
'Wow!' said Biff.
マークは大きなドアを開けた。
中には大きな戦闘車があった。
それはビフの模型に似ていた、でもそれは大きかった。
「すごい！」と、ビフが言った。
- PG 12: Mark let Biff go on the chariot.
Biff pretended she was a chariot driver.
She pretended she was in a race.
'I wish I could be a chariot driver,' said Biff.
マークはビフを戦闘車に乗せた。
ビフは戦闘車の騎手のふりをした。
ビフは、レースで走っているふりをした。
「戦闘車の騎手になりたいわ」と、ビフが言った。
- PG 13: Mark laughed at Biff.
'You have to be strong to race chariots,' he said.
'I'm in a race today.
Come and watch it.'
マークはビフのことを笑った。
「強くないと、戦闘車でレースする事はできないんだ」と、
マークが言った。
「今日、僕はレースに出るんだ。
見に来るかい？」
- PG 14: Everyone was hungry, so Diana took the children home.

'We can have some bread,' she said.

'My father is a baker.

He makes the best bread in Rome.'

みんなは、お腹が空いていたので、ダイアナは子どもたちを家へ連れ行った。

「パンを食べると良いわ」と、ダイアナが言った。

「私のお父さんは、パン屋なの。

ローマで一番おいしいパンを焼くのよ」。

PG 15: Everyone looked at the bread, but something was wrong.

The bread didn't look right.

It was flat.

It didn't look like bread at all.

みんなはパンを見た、けれど、何かがおかしかった。

パンは何か変に見えた。

それは、ぺちゃんこだった。

全然、パンの様には見えなかった。

PG 16: Diana's father made some more bread.

He baked it in the oven, but it was flat, too.

'This is bad,' said Diana's father.

'Nobody will buy bread like this.'

ダイアナのお父さんは、またパンを焼いた。

オーブンで焼いたが、また、ぺちゃんこだった。

「これはまずい」と、ダイアナのお父さんが言った。

「誰もこんなパンは買わないぞ」。

PG 17: Chip looked at the flat bread.

He had a good idea.

'We can make pizzas,' he said.

'What are pizzas?' asked Diana.

'We don't know what pizzas are.'

チップは平らなパンを見た。

良いアイデアがひらめいたのだ。

「ピザを作れるよ」と、チップが言った。

「ピザって何？」と、ダイアナが聞いた。

「私たち、ピザって何なのか知らないわ」。

PG 18: Chip told Diana's mother how to make pizzas.

Everyone helped.

Diana's mother cooked the pizzas in the big oven.

チップは、ダイアナのお母さんに、ピザの作り方を教えた。
みんなが手伝った。
ダイアナのお母さんは、大きなオーブンでピザを作った。

- PG 19: The pizzas looked good.
'I hope you like them,' said Chip.
'Everyone likes pizzas,' said Biff.
'They smell good,' said Diana's mother.
ピザはおいしそうに見えた。
「気に入ってくれると、いいんだけど」と、チップが言った。
「誰でも、ピザは好きよ」と、ビフが言った。
「良いにおいがするわ」と、ダイアナのお母さんが言った。
- PG 20: The pizzas tasted good too.
Diana's father was pleased.
'Now we can sell them,' he said.
'We can sell lots and lots.
What a good job that the bread was flat.'
それに、ピザはおいしかった。
ダイアナのお父さんは満足だった。
「これでパンが売れるぞ」と、お父さんは言った。
「たくさん、たくさん売れるぞ。
パンがぺちゃんこで良かったな」。
- PG 21: They went outside to sell the pizzas, but there was nobody in the street.
There was nobody to buy the pizzas.
'Where is everyone?' asked Biff.
Everyone had gone to the chariot races.
みんなはピザを売るために外に出たが、道には誰もいなかった。
ピザを買う人は誰もいなかった。
「みんなはどこ？」と、ビフが聞いた。
みんなは、戦闘車のレースに行ってしまった。
- PG 22: Diana's father was upset.
He looked at all the pizzas.
'All that work for nothing,' he said.
'How can we sell pizzas when everyone is at the chariot races?'
ダイアナのお父さんは悲しかった。
お父さんは、ピザを見た。
「あの苦勞が、無駄に終わってしまった」と、お父さんが言った。
「みんなが戦闘車のレースにいるのに、どうやってピザが売れるん

だ？」

- PG 23: Diana had an idea.
She put some pizzas in a basket.
‘Come on,’ she called.
‘If everyone is at the chariot races, we can sell the pizzas there.’
ダイアナにはアイデアがあった。
ダイアナは、ピザを数枚バスケットの中に入れた。
「行きましょう」と、ダイアナが叫んだ。
「もし、みんなが戦闘車のレースにいるのだったら、私たちはそこでピザを売るのがよ」。
- PG 24: They took the pizzas to the chariot races.
‘Come and buy a pizza,’ called Diana.
But nobody bought the pizzas.
Everyone was looking at the races.
みんなはピザを戦闘車のレースに持って行った。
「ピザを買いに、いらっしやい」と、ダイアナが声をかけた。
でも、誰もピザを買わなかった。
みんなは、レースを見ていた。
- PG 25: The children saw Mark, so they gave him one of the pizzas.
‘These pizzas are good,’ said Mark.
Biff looked at the chariot and she had a good idea.
子どもたちは、マークを見かけたので、マークにピザをあげた。
「このピザはおいしいな」と、マークが言った。
ビフは、戦闘車を見て、良いアイデアが浮かんだ。
- PG 26: The children had a banner.
It was about the pizzas.
Mark put it on his chariot.
The people laughed when they saw the banner.
子どもたちは旗を作った。
それは、ピザの絵の旗だった。
マークは、それを自分の戦闘車に付けた。
人々は、その旗を見て笑った。
- PG 27: ‘Why has Mark put a banner on his chariot?’ people asked.
‘And what are pizzas?’
The race began and everyone cheered when Mark came first.
「どうして、マークは戦闘車に旗を付けたんだ？」と、人々が聞いて

た。
「それに、ピザってなんだ？」
レースが始まって、マークが1等になると、みんなが歓声を上げた。
た。

- PG 28: The people ran to buy the pizzas.
'These pizzas are good,' they said.
'What a good idea to put a banner on the chariot.'
人々は、ピザを買いに走って来た。
「このピザはおいしい」と、みんなが言った。
「旗を戦闘車に付けるとは、なんておもしろいアイデアだろう」。
- PG 29: Just then, some soldiers grabbed the family and the children.
'You must stop selling pizzas,' they said.
'The Emperor wants to see you.
Come with us.'
その時、兵士がやってきて、家族と子どもたちを捕まえた。
「おまえたちはピザ販売を中止せねばならない」と、兵士が言った。
「皇帝が会いたいとおっしゃっている。
私たちと来るのだ」。
- PG 30: The Emperor was angry.
'This has got to stop,' he said.
'Who put this banner on the chariot?
And what are pizzas?'
'Would you like to try one?' asked Diana.
皇帝は怒っていた。
「これは、やめさせなければならない」と、皇帝が言った。
「この旗を戦闘車に付けたのは誰だ？
それに、ピザとはなんだ？」
「一つ、食べてみますか？」と、ダイアナが聞いた。
- PG 31: 'They taste good,' said the Emperor.
'You can deliver some to the palace.
But I don't want banners on the chariots,
So take your banner away.'
Just then, the magic key glowed.
「これはおいしい」と、皇帝が言った。
「宮殿に配達するが良い。
だが、旗を戦闘車に付けないで欲しい、

だから、旗を取りはずさない」
その時、魔法の鍵が光った。

- PG 32: Chip looked at the little banner.
He put it on Biff's chariot.
'The Emperor didn't like banners on chariots,' he said.
'I wonder what Mrs May will think.'
チップは、小さな旗を見た。
チップは、それをビフの戦闘車に付けた。
「皇帝は、戦闘車に旗を付けるのを嫌がったけど」と、チップが
言った。
「メイ先生はどう思うかな？」

Oxford Reading Tree Level 7 More Stories B

- ① The Power Cut 「停電」
- ② The Riddle Stone Part 1 「なぞなぞの石 パート1」
- ③ The Riddle Stone Part 2 「なぞなぞの石 パート2」
- ④ A Sea Mystery 「海の不思議」
- ⑤ The Big Breakfast 「たっぷりの朝ごはん」

The Power Cut 「停電」

- PG 1: The family was going on holiday. They were taking Biff and Chip. Mum and Dad were busy packing the car.
“Will you pack these for us, please?” asked Wilma.
一家は休暇に出かけようとしています。ビフとチップも一緒です。お母さん、お父さんはせっせと車に荷物を積んでいます。
「これもみんな積んでくれる？」ウィルマが頼みました。
- PG 2: “There will be lots to do,” said Dad. “You won’t need those.”
“We will,” said Wilf. “We must take the games station. I’ve got a great new game.”
「やることはたくさんあるんだよ」お父さんが言いました。「そんなもの、いらないだろう」
「いるよ」ウィルフが言いました。「ゲーム機は持っていかなきゃ。新しいゲーム、最高なんだから」
- PG 3: “We want to watch these films,” said Wilma. “We haven’t seen some of them yet.”
“And can we take the CD player?” asked Biff.
「映画もみたいわ」ウィルマが言いました。「このうちの何本かはまだ観てないの」
「それからCDプレーヤーも持っていったいい？」ビフがたずねました。
- PG 4: It was a long journey. It took hours. They stopped for a break.
“Let’s get a drink” said Mum.
“Can we play a game in the arcade first?” asked Wilf.
長い道のりでした。何時間もかかりました。途中で休憩をとることにしました。
「何か飲みましょう」お母さんが言いました。
「先にゲームセンターでゲームして来てもいい？」ウィルフがたずねました。

- PG 5: At last they arrived at the cottage.
“We’re in the middle of a forest,” said Wilf.
“We’re in the middle of nowhere,” said Wilma.
ようやく一行は別荘に着きました。
「森のど真ん中に来ちゃったね」ウィルフが言いました。
「何も無いところに来ちゃったね」ウィルマが言いました。
- PG 6: They went inside the cottage. Mum and Dad began to unpack the car.
There was a big television in the front room.
“Great!” said Chip. “Let’s watch TV.”
みんなは別荘の中に入りました。お母さん、お父さんは車から荷物を降ろし始めました。正面の部屋には大きなテレビがありました。
「やった！」チップが言いました。「テレビを観よう」
- PG 7: “We could play some games,” said Wilf. “Could you bring in our games station, Dad?”
“Not now,” said Dad. “Come and help us unpack the car.”
「ゲームしようよ。」ウィルフが言いました。「お父さん、ゲームステーションを持ってきて」
「そんなの後だ。車から荷物を降ろすのを手伝いなさい」
- PG 8: At breakfast Wilma put on a film. Dad sighed. “Get dressed everyone. We didn’t come on holiday to watch TV.”
“Can we watch this first?” asked Wilma.
“Later,” said Dad. “Let’s go out.”
朝食の時間、ウィルマは映画を流していました。お父さんはため息をつきました。「みんな着替えなさい。テレビを観るために休暇にきたんじゃないんだよ」
これを観てからじゃだめ？」ウィルマがたずねました。
「後にしなさい。さあ出かけよう」
- PG 9: “Wasn’t it fun on the beach today?” said Mum.
But nobody said anything. Wilf and Biff were busy playing a game. Chip

and Wilma were listening to a CD.

「今日はビーチに行かない？ 楽しいわよ」お母さんが言いました。
でも誰も返事をしません。ウィルフとビフは夢中でゲームをしています。
チップとウィルマはCDを聞いています。

PG 10: Suddenly all the lights went out. The television and the CD player went off.

“What’s happened?” called Biff.

Dad came in with a torch. “There’s been a power cut!” he said.

すると突然、家中の灯りが消えました。テレビやCDプレーヤーの電源も切れてしまいました。

「どうしちゃったの？」ビフが大声を出しました。

そこへお父さんが懐中電灯を手にとってきました。「停電だ！」

PG 11: Mum found a lamp.

“What if the power doesn’t come back on?” asked Chip, looking at the TV.

“We’ll have to do without it,” said Dad.

“Oh no!” said the children.

お母さんがランプを見つけました。

「電気が戻らなかったらどうなるの？」チップがテレビの方を見ながら言いました。

「電気なしでやっていけなくちゃ」お父さんが言いました。

「えー、そんなあ！」子どもたちが言いました。

PG 12: The power didn’t come back on.

“It may be off for a long time,” said Dad. It was time to eat. They all sat round the table and had supper by candlelight.

電気は復旧しませんでした。

「時間がかかるかもしれないな」お父さんが言いました。食事の時間でした。みんなでテーブルを囲み、ろうそくの灯りで夕食をとりました。

PG 13: It was fun eating in the dark. They took it in turns to tell stories. Dad told them a funny story about a time when he was a little boy. It made them

all laugh.

暗がりの中で食事をとるのは楽しいものでした。一人ずつ順番に話をしていきました。お父さんは、自分が小さかったころのおもしろい話をしてみんなに聞かせました。みんなはそれを聞いて大笑いしました。

- PG 14: That night the power didn't come back on. The children had to use the lamp to go to bed, Chip made a shadow on the wall with his hands. "Guess what it is," he said.

夜になっても電気は復旧しませんでした。子どもたちはランプを使って寝床につかなくてはなりませんでした。チップは手で壁に影絵を作りました。

「これ、な～んだ」チップは言いました。

- PG 15: Wilma shone a torch under her chin. The light made her face look scary. "Whoooh!" she said. "I'm a monster." Everyone laughed. Then Mum came in and said it was time to go to sleep.

ウィルマはあごの下に懐中電灯をあてました。光りに照らされ恐ろしい顔になっています。

「うー！怪物だぞう」。みんなは、げらげら笑いました。そこへお母さんが入ってきて、もう寝る時間よ、と言いました。

- PG 16: The next morning there was still no power. So the family spent all day on the beach. They played lots of games.

"It's late," said Mum. "It's time to go."

"Can't we stay a bit longer?" asked Wilf.

次の日の朝になっても、電気は復旧しませんでした。そこで一家は一日中ビーチで過ごすことにしました。たくさんゲームをして遊びました。

「もう遅いわ」お母さんが言いました。「帰りましょう」

「もう少しここにいられない？」ウィルフがたずねました。

- PG 17: "I've got an idea," said Dad. "Let's build a fire. We could cook supper." "Brilliant!" they all shouted.

"Let's get some driftwood." Said Mum.

"I'll go and get the food," said Dad.

「こうするのはどうかな」お父さんがいいました。「火を起こそう。ここで夕飯を作るんだ」。「おもしろそう！」みんなが興奮して言いました。
「流木を集めましょう」お母さんが言いました。
「私は食料を取りに行ってくるよ」お父さんが言いました。

- PG 18: It was getting dark by the time the fire was finished.
“Hey Wilf! That looks like a giant bird’s nest,” said Mum. “You light it, not lay an egg in it!”
たき火の用意ができるころには、すっかり辺りは暗くなっていました。
「ねえ、ウィルフ！ それって巨大な鳥の巣みたいね」お母さんが言いました。
「それは火をつけるものよ。(間違えて)卵を産まないようにね。」
- PG 19: Dad cooked lots of food on the fire. Then Mum toasted some marshmallows. They all sat and looked at the stars.
“I have a surprise,” said Dad. “Sparklers!”
お父さんはたき火でたくさんの料理を作りました。それからお母さんはマシュマロを温めました。みんなで座って星を眺めました。
「驚くな」お父さんが言いました。「線香花火だ！」
- PG 20: “Sorry,” said Dad the next morning. “Still no power.”
“We can do without it,” smiled Chip.
“Last night was magic,” said Wilf.
“What shall we do tonight?” asked Biff.
「ごめんよ」お父さんが次の日の朝言いました。「まだ電気が使えないんだ」
「何とかなるよ」チップがにっこり笑いました。
「きのうの夜は最高だったね」ウィルフが言いました。
「今夜は何をする？」ビフが言いました。
- PG 21: That night Wilma had a good idea.
“We could play hide and seek,” she said. “If you are ‘It’ you have a torch.”
Everyone hid around the dark cottage. Wilf was ‘It’. He counted to a

hundred.

その夜、ウィルマはいいことを思いつきました。

「かくれんぼをしようよ。『鬼』が懐中電灯を持つのに」

みんな真っ暗な家のあちこちに隠れました。ウィルフが「鬼」です。ウィルフは百まで数えました。

PG 22: Wilf looked in every room.

“Found you, Biff!” he called. Biff was hiding behind a big plant.

He found Chip lying in the bath. Wilma was behind the TV. Mum was under a bed.

ウィルフは家中の部屋を見てまわりました。

「見つけたよ、ビフ！」大きな声で言いました。ビフは大きな植物の後ろに隠れていました。

それから浴槽の中で横になっているチップを見つけました。ウィルマはテレビの後ろにいました。お母さんはベッドの下にいました。

PG 23: But where was Dad? Suddenly, the moon came out from behind the clouds. It lit up the windows. Dad was hiding behind the curtains.

“That gives me an idea,” thought Wilma.

ところで、お父さんはどこでしょう？ 突然、雲の陰から月が現れました。

そして窓を照らしました。お父さんはカーテンの後ろに隠れていました。

「(それを見て) そうだ、いい考えがある」ウィルマは考えました。

PG 24: The next day Biff, Chip and Wilf went with Wilma to the woods.

“Why have we brought the boxes and a sheet?” asked Chip.

“And why are we here so early?” yawned Wilf.

次の日、ビフ、チップ、ウィルフはウィルマと一緒に森へ行きました。

「どうして箱とシーツを持って来たの？」チップがたずねました。

「どうしてこんな朝早くにこんな所に来たの？」ウィルフがあくびをしました。

PG 25: “There’s loads to do before tonight.” Wilma’s eyes sparkled. “This evening, we are going to do a shadow play!”

“Brilliant!” said Chip. “What’s that?”

「夜までにやらなくちゃいけないことがあるの」ウィルマは目をきらきらさ

せて言いました。「今夜私たちは影絵でお芝居をやるのよ！」
「おもしろそう！」チップが言いました。「でも何それ」

PG 26: The children worked all day. They cut out shapes from the cardboard boxes. Wilf tied the sheet between two trees.

“What are you doing?” Dad asked.

“It’s a surprise,” said Wilma.

子どもたちは一日かかって準備しました。ダンボール箱を色んな形に切り抜きました。ウィルフは二つの木の間にシーツを結びつけました。

「何をしてるんだい？」お父さんがたずねました。

「後のお楽しみよ」ウィルマが言いました。

PG 27: There was a golden sunset that evening. The children had put down lots of candles in jars.

“How beautiful!” said Mum.

“It’s like magic!” gasped Dad.

その日の夕焼けは金色に輝いていました。子どもたちはびんに入れたろうそくを足元にたくさん並べました。

「なんてきれいなもの！」お母さんが言いました。

「まるで夢みたいだ！」お父さんは息をのみました。

PG 28: Suddenly Biff turned up the lamp. The sheet glowed. The play began. It was about elves. The elves were cardboard puppets. Wilf and Chip moved the puppets around.

突然ビフがランプをともしました。するとシーツが白く浮かび上がりました。お芝居の始まりです。それはエルフ(妖精)たちのお話でした。エルフの人形はダンボールで作ったものです。ウィルフとチップが人形を動かしました。

PG 29: Biff did the elves’ voices. Wilma played the guitar. They all sang songs. It was a good story. It was funny and sad. It made Mum laugh and Dad cry.

ビフが小人たちのセリフを言いました。ウィルマがギターを弾きました。そしてみんなで歌を歌いました。とてもいいお話でした。笑いあり涙ありのお話でした。そのお話にお母さんは声をたてて笑い、お父さんは涙を

流しました。

PG 30: The play had finished. Everyone bowed.

“Hooray!” shouted Mum. “Well done!”

“Now,” said Dad. “I’ve got a surprise.”

“What is it?” asked Wilma.

“You’ll see,” smiled Dad.

お芝居が終わりました。子どもたちはおじぎしました。

「やったわね！」お母さんが大声で言いました。「すばらしかったわ！」

「さあ」お父さんが言いました。「わたしからもびっくりがあるぞ」

「なあに？」ウィルマがたずねました。

「すぐわかるさ(You’ll see)」お父さんはにっこり笑いました。

PG 31 They went back to the cottage. It was pitch black.

“We can’t see anything,” said Wilf.

“I said ‘you’ll see’ and now you can,” said Dad. He turned on the power.

みんなは別荘に戻りました。中は真っ暗です。

「何も見えないよ」ウィルフが言いました。

「言っただろ、『すぐ見えるさ(You’ll see)』って。ほら、ごらん」お父さんが言いました。そして電気をつけました。

PG 32 Dad laughed. “Surprise!” he said.

“I wanted you to enjoy the holiday without TV. There was no power cut.”

“Turn it off again,” said the children. “We can do without it.”

お父さんは笑いました。そして、「びっくりしたかい！」と言いました。

「君たちにはテレビなしで休日を楽しんでもらいたかったんだ。停電なんて本当はなかったのさ」

「もう一度電気を消して」子どもたちは言いました。

「電気がなくても何とかなるよ」

The Riddle Stone Part 1 「なぞなぞの石 パート1」

- PG 1: Dad had pulled up some floorboards.
“Hello!” he said. “What’s this?”
Under the floor was a stone. It had some strange writing on it.
お父さんが床板を何枚かはがしました。
「おや！」お父さんが言いました。「何だこれ？」
床の下から一枚の石が出てきました。そこには見慣れぬ文字で何か書いてあります。
- PG 2: Dad was going to throw the stone away, but Chip wanted to keep it.
“Look at this,” he said to Biff. “Do you think the writing is Chinese?”
“I don’t know,” said Biff.
お父さんはそれを捨てようとしてました。でもチップはそれを取っておきたいと思いました。
「これを見て」チップはビフに言いました。「この文字、中国語かなあ？」
「わからないわ」ビフは言いました。
- PG 3: Chip took the stone to school. He showed it to a boy called Hong.
“It is written in Chinese,” said Hong. “I can’t read it, but my grandfather can.”
チップはその石を学校に持っていきました。そしてホンという少年に見せました。
「書かれているのは中国語だよ」ホンは言いました。「ぼくには読めないけど、ぼくのおじいちゃんだったら読めるよ」
- PG 4: Hong’s grandfather always came after school to take Hong home.
Chip showed him the stone.
“Yes, it is Chinese,” said Hong’s grandfather. “It says, ‘Do you mind?’”
ホンのおじいさんは放課後いつもホンを迎えに来ます。
チップはその石をおじいさんに見せました。
「そうだ、中国語だ」ホンのおじいさんは言いました。「『いやですか(気

にしますか)?』と書いてある」

- PG 5: “What a strange question,” said Biff.
“It may be a riddle,” said Hong’s grandfather. “See! The stone is broken. Maybe the answer is on the other half.”
「変な質問だわ」ビフは言いました。
「なぞなぞかもしれないぞ」ホンのおじいさんは言いました。
「見てごらん！石は割れている。答えはこの片割れにあるのかもしれない」
- PG 6: Chip gave Hong the stone to keep. He put it in his bag.
“May Hong come round to play with us?” asked Biff.
“All right,” said Hong’s grandfather.
チップはホンにその石を預けました。ホンは石をかばんにしまいました。
「ホンにうちに遊びにきてもらってもいい？」ビフはたずねました。
「いいとも」ホンのおじいさんは言いました。
- PG 7: They went to play in Biff’s room.
“What is a riddle?” asked Chip.
“It’s a puzzle in words,” said Hong.
みんなはビフの部屋に遊びに行きました。
「なぞなぞって何？」チップがたずねました。
「言葉のパズルだよ」ホンが言いました。
- PG 8: “Here is a good riddle,” said Hong. “How do you spell ‘Hungry horse’ using only four letters?”
“We don’t know,” said Biff.
「いいなぞなぞがあるよ」ホンが言いました。「『おなかのすいた馬』をたった4文字であらわすにはどうしたらいいでしょう？」
「わからないわ」ビフが言いました。
- PG 9: “It’s easy,” laughed Hong. “MTGG. Here’s another riddle. What is this? The more it dries the more it gets wet.”
Suddenly, the magic key began to glow.

「簡単だよ」ホンは笑いました。「*MTGG だ。もうひとつ、別のなぞなぞ。
乾けば乾くほどぬれるものって、なんだ？」
突然、マジックキーが白く光りはじめました。
(*編集部注: MTGG の MT は発音が近い empty と、GG はイギリス英語
で馬の愛称を指す gee-gee とかけている。「MTGG」=「empty gee-gee」で、
「からっぽ/腹ペコの馬」の意となる)

- PG 10: The magic took them to a rocky valley.
Four paths met. There was a signpost pointing four ways. Each way
pointed to Riddle Mountain
魔法の力が 3 人を岩の多い谷間に連れて行きました。
4 本の小さな道が交わっています。4 つの方向を指し示す道しるべが立
っています。どの道も『なぞなぞ山』を指しています。
- PG 11: A boy was sitting on a rock. “My name is Ty,” he said. “I want to go to
Riddle Mountain, but I don’t know which path to take. I can’t think of the
answer to this riddle.”
一人の少年が岩に腰かけていました。
「ぼくの名前はタイ」少年は言いました。「『なぞなぞ山』に行きたいんだ
けど、どの道を行けばいいのかわからないんだ。このなぞなぞの答え
がわからなくて」
- PG 12: The riddle was on a tall post. It said, “It’s only one colour, but it can grow.
Sticks to your feet, wherever you go. There in the sun, not in the rain.
Never does harm, never feels pain.”
なぞなぞは高い柱の上に書かれていました。そこにはこうあります。「色
は一色しかないが、大きくなる。どこに行くにも足もとから離れない。晴
れの日にはあるが、雨の日にはない。決して人を傷つけることはなく、
それ自体が痛い思いをすることもない」
- PG 13: “The answer is a shadow,” said Hong. “Look at the shadow of the post. It
points up that path. That must be the way,”
“Are you sure?” asked Biff.
“Yes, it’s a riddle,” said Ty. “Let’s go!”

「答えは影だ」ホンが言いました。「柱の影を見て。あの道をさしてよ。
あっちの方向に違いない」
「本当に？」ビフはたずねました。
「そうさ、なぞなぞだもの」タイは言いました。「さあ、行こう！」

PG 14: “It is hard to get to Riddle Mountain,” said Ty. “It will be dangerous. I may never get there.”

“Then why do you have to go?” asked Biff.

「『なぞなぞ山』まで行くのは大変なことなんだ」タイが言いました。「危険な目にあうことだろう。決してたどり着くことはできないかもしれない」
「それならなぜ行かなくちゃならないの？」ビフがたずねました。

PG 15: “I want to be the Riddle Maker,” said Ty. “I have to get to Riddle Mountain. I have to answer *all* the riddles on the way. The last riddle is the hardest. No one has ever found the answer.”

「ぼくは『なぞなぞ出題者』になりたいんだ」タイは言いました。「そのためには『なぞなぞ山』まで行かなくちゃならない。道の途中で出される全てのなぞなぞに答えなくちゃならない。最後のなぞなぞが一番難しいんだ。今まで誰も答えがわかった者はいないんだ」

PG 16: Suddenly, a huge giant stood in the way.

“I hope he’s friendly,” said Chip.

“Answer this riddle and you can pass by,” roared the giant.

突然、それはそれは大きな巨人が行く手に立ちはだかりました。

「気さくな人だったらいいんだけど」チップが言いました。

「このなぞなぞに答えられれば、ここを通してやる」大男はうなるような声で言いました。

PG 17: “Write down how much I weigh,” he said.

“But he must weigh tonnes!” said Biff.

“No, it’s a riddle,” said Hong. “I can do it.” He wrote down the answer.

「俺様の体重を書け！」巨人は言いました。

「何トンもあるに違いないわ」ビフが言いました。

「いや、これはなぞなぞだよ」ホンは言いました。「わかった」ホンが答え

を書きました。

- PG 18: “Good luck in the Land of Riddles,” said the giant.
“What did you write down?” asked Chip.
“I wrote the words ‘how much I weigh,’” said Hong.
「なぞなぞの国で、健闘を祈る」巨人は言いました。
「なんて書いたの？」チップはたずねました。
「『俺様の体重』って書いたのさ」ホンが言いました。
- PG 19: It was not far to the top of the hill. Suddenly, a dragon stood in the way.
“I hope he’s friendly,” said Hong.
“Look!” said Biff. “There are bubbles coming out of his mouth!”
丘の頂上まであと少しの所まで来ました。突然、一頭の竜が行く手に立ちはだかりました。
「気さくな竜だったらいいんだけど」ホンが言いました。
「見て！」ビフが言いました。「口から泡が出ているわ！」
- PG 20: The dragon spoke.
“Over there is Riddle Mountain,” it said. “You have a long way to go.”
“Help!” said Ty. “The journey looks dangerous.”
竜は言葉をしゃべりました。
「あそこに見えるのが『なぞなぞ山』だ」そう言いました。「長い道のりだぞ」
「助けてください！」タイは言いました。「旅路は危険が多そうです」
- PG 21: Below was a black lake. Across the lake, the land was dry and rocky. Beyond, there was a deep river and dark forest. Far away was a tall, grey mountain.
眼下には黒い湖が広がっていました。湖の向こう側は、乾いた岩地になっています。その先には深い川と暗い森があります。はるか遠くに高い灰色の山が見えました。

- PG 22: Huge bubbles came out of the dragon's jaws.
"Answer this riddle," it said. "How many sides does a bubble have?"
"That's easy," said Hong. "It has two."
巨大な泡が竜の口から出ています。
「このなぞなぞに答えろ」竜は言いました。「泡にはいくつの面がある？」
「簡単だ」ホンが言いました。「二つ」
- PG 23: "The inside and the outside," he said.
"Good," said the dragon. "Now step inside this bubble."
Hong stepped into the bubble. It began to float away.
「内側と外側だ」ホンは言いました。
「正解だ」竜が言いました。「さあこの泡の中に足を踏み入れて」
ホンは泡の中に踏み込みました。すると泡はゆらゆらと動き出しました。
た。
- PG 24: "Step into a bubble," yelled Hong.
They all stepped inside the bubbles and floated up and up.
"This is scary," said Biff. "What if the bubbles pop?"
「泡に入って」ホンが大声で言いました。
みんなは泡の中に入り、上へ上へと浮かび上がりました。
「怖いわ」ビフが言いました。「もし泡がはじけたら？」
- PG 25: They floated on and on. At last, they began to float down to the black lake.
"I hope the bubbles don't pop here," yelled Chip.
子どもたちはずっと漂っていました。とうとう黒い湖に向かって落ち始めました。
「ここで泡がはじけませんように」チップは叫びました。
- PG 26: Then the bubbles popped and the children fell into the lake. Suddenly, a huge serpent rose out of the water. "I don't like this adventure," said Biff.
その時泡がはじけ、子どもたちは湖に落ちました。
突然、それはそれは大きな蛇が水の中から現れました。
「こんな冒険まっぴらだわ」ビフがいました。

- PG 27: “What is this?” said the serpent, “the more it dries, the more it gets wet?”
 “It’s easy,” said Hong. “It’s a towel.”
 “Good,” said the serpent. “now climb on my back.”
 「問題だ」蛇が言いました。「乾けば乾くほど濡れるものってなあに？」
 「簡単だ」ホンが言いました。「タオル」
 「正解」蛇は言いました。「さあ私の背中に乗って」
- PG 28: The serpent swam across the lake.
 “How do you know the answer to all these riddles, Hong?” asked Ty.
 “I don’t know,” said Hong. “They just come to me.”
 蛇は湖を泳いで渡りました。
 「ホン、君はなぜなぞの答えがどうして全部わかるの？」
 「わからないよ」ホンが言いました。「ただひらめくんだ」
- PG 29: Goblins were waiting for the children. They pulled and pinched them.
 “Ouch! That hurts,” said Chip.
 “Ha! You won’t answer the next riddle,” said one of the goblins.
 ゴブリン(小鬼)たちが待ちかまえていました。そして、子どもたちを引っ
 ぱったりつねったりしました。
 「いたっ！痛いなあ」チップが言いました。
 「はあ！次のなぜなぞには答えられないだろう」ゴブリンの一人が言
 いました。
- PG 30: The goblins put the children in a cage. One of the goblins stole the magic
 key. “Oh no!” said Biff. “Now we can’t get back from this adventure.”
 ゴブリンは子どもたちをおりの中に入れました。ゴブリンの一匹がマジッ
 クキーを盗りました。
 「ああ、どうしよう！」ビフが言いました。「もうこの冒険から帰れないわ」
- PG 31: The Goblin King spoke to them.
 “Answer this,” he said. “How do you want to die?”
 “We don’t want to die,” said Chip.
 ゴブリンの王は子どもたちに話しかけました。

「答えるんだ」そう言いました。「おまえたち、どうやって死にたい？」
「ぼくらは死にたくなんでないよ」チップが言いました。

PG 32: Hong began to laugh.

“It’s not funny,” said Biff. “We don’t want to die.”

“It’s a riddle,” said Hong. “Don’t worry. I know the answer.”

ホンが笑い出しました。

「おかしくなんてないわ」ビフが言いました。「私たち、死にたくないもの」

「これはなぞなぞだよ」ホンが言いました。「心配しないで。答えはわか
ってる」

Now read Part 2...
この続きはパート2をお読みください

The Riddle Stone *Part 2* 「なぞなぞの石 パート2」

- PG 1: **Have you read part 1?**
パート1はもう読みましたか？

The Goblin King looked at the children. His small eyes glinted and he snapped his long, thin fingers.

“How do you want to die?” he asked.

ゴブリンの王は子どもたちを見ました。小さな目をぎらぎら光らせながら、長くて細い指をパチンと鳴らしました。

「おまえたち、どうやって死にたい？」王はたずねました。

- PG 2: “We want to die of old age,” said Hong.
“Grrr! That is the right answer,” said the Goblin King. “So I must let you go.” He opened the door of the cage.
「年をとって死にたい」ホンはそう言いました。
「ぐうう！ 正解だ」ゴブリンの王は言いました。「お前らを出してやらなきゃならないな」
王はおりのドアを開けました。

- PG 3: “Brilliant!” said Chip. “But how did you know the right answer?”
“I don’t know,” said Hong. “I just did.”
“Let’s find the next riddle,” said Ty.
「すごい！」チップが言いました。「でもどうして正解がわかったの？」
「わからないよ」ホんが言いました。「ただひらめいたのさ」
「次のなぞなぞを見つけよう」タイが言いました。

- PG 4: “The goblins still have the magic key,” said Biff. “We must get it back.”
“Give us back our key,” said Chip.
“No,” said a goblin. “We won’t.”
「ゴブリンたちはまだマジックキーを持ったままだわ」ビフは言いました。
「取り返さなくちゃ」
「鍵を返して」チップは言いました。

「いやだね」ゴブリンは言いました。「返すもんか」

PG 5: “Give it back!” shouted Chip. “Make us!” called the Goblins. Hong had an idea. He spoke to the Goblin King.

「返してよ！」チップが叫びました。

「そうさせてごらん！」ゴブリンたちが叫びました。

ホンには考えがありました。ゴブリンの王に言いました。

PG 6: “We will ask you a riddle,” Hong said. “You must give us back the key if you can’t answer it.” “All right,” said the Goblin King. “What is the riddle?”

「今度はぼくたちがなぞなぞを出すよ」ホンは言いました。「答えられなかったら鍵を返してもらうよ」

「いいだろう」ゴブリンの王は言いました。「どんななぞなぞだ？」

PG 7: Hong wrote in the sand,

$1 + 1 = 6$.

“Make this work by drawing a straight line,” he said.

The goblins scratched their heads. At last they said. “We can’t do it.”

ホンは砂にこう書きました。

$1 + 1 = 6$

「一本線を書き足して、この計算を完成させてみて」ホンは言いました。

ゴブリンたちは頭をかきむしりました。そしてついにこう言いました。「お手上げだ」

PG 8: Hong put a line on the ‘plus’.

“One, and one, and four add up to six!” said Hong

“Very clever,” said the Goblin King and he gave Biff the key.

ホンは「たす」の記号に一本線を足しました。

「1と1、それに4を足すと6！」ホンは言いました。

「なんと賢い」ゴブリンの王はそう言って、ビフに鍵を返してくれました。

PG 9: The children went on. At last, they came to a flat desert.

There were strange shapes in the sky.

Suddenly, the shapes flew down and whizzed over the children's heads.
子どもたちは先へ進みました。ようやく平坦な砂漠までやって着きました。
空には奇妙な形のもものが飛んでいます。
突然、その形が降りてきて、子どもたちの頭の上をピューッとかすめました。

- PG 10: "Ouch! That one hit me," said Ty.
The flying shapes were kites. The kites dived at the children.
"What is the answer to this riddle?" shouted the kite flier.
「痛い！当たったぞ」タイが言いました。
飛行物体の正体は凧でした。凧は子どもたちめがけて急降下してきます。
「このなぞなぞの答えはなんだ？」
凧使いが叫びました。
- PG 11: "I can be *cracked, I can be played, I can be told, I can be made. What am I?" "I know this one," said Hong. "The answer is a joke."
「人は私を crack したり、遊んだり、言ったり、創ったりする。さあ、私はだれ？」
「わかった」ホンが言いました。「答えは冗談(悪ふざけ)だ」
(*編集部注: crack には「割る」と「冗談を言う」の二重の意味がある)
- PG 12: The kite flier let them pass, but next they came to a wide river.
"We can never cross this," said Chip. "It's too deep and dangerous."
Then they saw an old man on a raft.
凧使いは子どもたちを通らせた。しかしその先には大きな川がありました。
「こんな川、絶対渡れないよ」チップが言いました。
「とっても深いし危険すぎる」
すると、いかだに乗った老人が現れました。
- PG 13: "I will take you across," said the old man. "But first answer this riddle. I have seven children. Half of them are boys. How can this be?"
「お前らを渡らせてやろう」老人は言いました。「だが、まずこのなぞなぞ

に答えるのだ。私には7人の子どもがいて、その半分は男の子だ。これはどういうことかな？」

- PG 14: “I know the answer,” said Hong. “All your children are boys.”
“That is right,” said the old man. “I will take you across the river.”
「わかった」ホンは言いました。「子どもは全員男の子だ」
「正解だ」老人は言いました。「お前らを川の向こうに連れて行ってやろう」
- PG 15: “How *do* you know the answer to all the riddles,” Ty asked Hong.
“I don’t know,” said Hong. “The answers just come to me.”
「なぜなぞの答えがどうして全部わかるの？」タイはホンにたずねました。
「わからないよ」ホンは言いました。「ただ答えがうかぶんだ」
- PG 16: The children came to a dark, gloomy forest. The trees were bent and twisted. “What a scary place,” said Biff. “I can see eyes looking at us.”
子どもたちは暗くて陰気な森までやってきました。木々は曲がったりねじれたりしています。
「なんて気味の悪い所なの」ビフが言いました。「いくつもの目が私たちを見ているわ」
- PG 17: Suddenly, wolves sprang out of the trees. They had red eyes and long, sharp, white teeth.
“They’re after us,” yelled Chip. “Run!”
突然、狼たちが木の間から姿を現しました。狼たちの目は赤く、長くてとがった白い歯をしています。
「ぼくたち、ねらわれてるよ」チップが叫びました。「走れ！」
- PG 18: The children ran fast, but the wolves were faster.
“Quick!” yelled Biff. “Climb a tree.”
The children climbed quickly, but Hong was a bit slow. A wolf sprang up at him.
子どもたちは一目散に走りました。でも狼たちの方が足は早かったので

す。

「早く！」ビフが叫びました。「木に登るのよ」

子どもたちは大急ぎで登りました。ところがホンは少し遅れてしまいました。一匹の狼がホンに飛びつきました。

PG 19: The wolf snapped at Hong. It sank its teeth into his bag and pulled it off his back.

“Help!” yelled Hong.

狼はホンにかみつこうとしました。ホンのかばんにがぶりと食いつき、背中からかばんを引きはがしました。

「助けて！」ホンは叫びました。

PG 20: Then a strange woman came out of the trees. The wolves ran up to her. The Wolf Woman told the wolves to sit. She told the children to climb down.

すると奇妙な女が木の間から出てきました。狼たちは女にかけよりました。狼女は狼たちに座るように言いました。そして子どもたちに降りてくるよう、言いました。

PG 21: The Wolf Woman picked up Hong’s bag, but she gave it to Ty.
“Answer this riddle,” she said. “*It lives half its life. It dies half its life. It dances to no music. It drinks with no mouth.”

狼女はホンのかばんを拾ってくれました。しかしそのかばんをタイに渡しました。

「このなぞなぞに答えなさい」狼女は言いました。「半分は生きていて、半分は死んでいる。音楽なしで踊る。口がないのに飲み物を飲む」

PG 22: This time, Ty knew the answer. “That’s easy,” he said. “It’s a tree.”
“Good,” said the Wolf Woman. “The next riddle is at Riddle Mountain. No one has ever got it right.

今度はタイが答えをわかりました。「簡単だ」タイは言いました。「それは木だね！」

「正解よ」狼女が言いました。「次のなぞなぞは、『なぞなぞ山』で出題されるわ。今までに答えられた者はいないのよ」

- PG 23: The children went on. Then Biff said, "Hong has known the answers to all the riddles, but not the last one. Why?"
"I don't know," said Hong.
"It's strange," said Biff.
子どもたちは先に進みました。それからビフが言いました。
「ホンはなぜなぜの答えを何でも知っていたわ。でもさっきのはわからなかった。どうして？」
「わからないよ」ホンが言いました。
「おかしいわね」ビフが言いました。
- PG 24: By now they were at Riddle Mountain. At the top was a cave.
"The last riddle will be up there," said Ty. "Come on!"
ついに子どもたちは『なぜなぜ山』までやって来ました。頂上には洞穴があります。
「最後のなぜなぜはあそこにあるんだろう」タイが言いました。「行こう！」
- PG 25: They climbed up to the cave.
"What a climb!" said Chip. "I'm tired."
"Let's have a rest," said Ty.
The children sat down. Ty took off Hong's bag.
子どもたちは洞穴まで登りました。
「すごい坂だったなあ」チップが言いました。「疲れたよ」
「ちょっと休もう」タイが言いました。
子どもたちは座りました。タイはホンのかばんを降ろしました。
- PG 26: Suddenly, the ground began to shake. A stone stature rose up out of the earth. The statue opened its hand and spoke.
"Who answers this riddle, will be the Riddle Maker!" it said.
突然、地面が揺れ始めました。石像が地面の中から現れました。石像は手を開いて言いました。
「このなぜなぜを答えるものが、『なぜなぜ出題者』になれるのだ！」石

像は言いました。

PG 27: “This is the riddle,” said the stature. “If the answer I give is ‘yes’, but what I mean is ‘no’, then what is the question?”

Everyone looked at Hong.

「問題を言う」石像は言いました。「ある質問に対して“Yes”と答えると実際は“No”の意味になる。その質問とは？」

みんなはホンの方を見ました。

PG 28: “I don’t know the answer,” said Hong.

“Neither do I,” said Ty sadly.

“We’ve failed,” said Biff.

“Wait!” said Chip. “I have an idea!”

「ぼく、答えがわからないよ」ホンが言いました。

「ぼくもだ」タイが悲しそうに言いました。

「これでおしまいね」ビフは言いました。

「待って！」チップが言いました。「考えがある」

PG 29: “Where is that stone with the Chinese writing?” he asked.

“It’s in my bag,” said Hong.

“Ty knew the Wolf Woman’s riddle and he had Hong’s bag,” said Biff.

「中国語が書いてある石はどこ？」チップはたずねました。

「ぼくのかばんの中だ」ホンが言いました。

「タイが狼女のなぞなぞに答えた時、ホンのバッグを持っていたね」ビフは言いました。

PG 30: “Maybe whoever has the stone can answer riddles,” said Chip.

Ty took the stone out of the bag.

“I know the answer to the question,” he said. “It is ‘Do you mind?’”

「あの石を持っていれば、誰でもなぞなぞに答えられるのかもしれない」

タイはかばんから石を取り出しました。

「問題の答えがわかったぞ」タイは言いました。「『いやですか？』」だ。

- PG 31: Ty put the stone in the statue's hand.
"It is the right answer," said the statue. "You are the new Riddle Maker."
Just then the magic key began to glow. The adventure was over.
タイはその石を石像の手の中に置きました。
「正解だ」石像は言いました。「君が新しい『なぞなぞ出題者』だ」
ちょうどその時、マジックキーが白く光り始めました。冒険は終わったの
です。
- PG 32: "So we knew the answer all along," said Chip. "It was on the stone."
"Well, I didn't want to be the Riddle Maker," said Hong. "Did you?"
"No," said Biff. "And I never want to hear another riddle."
「最初から答えはわかっていたよね」チップが言いました。「石に書いて
あったんだもの」
「うん、でもぼくは『なぞなぞ出題者』にはなりたくなかったんだ」ホンは
言いました。
「君たちは？」
「私たちもよ」ビフが言いました。「もう二度となぞなぞなんて聞きたくな
いわ」

A Sea Mystery 「海の不思議」

- PG 1: “It’s the last day of the holiday,” said Kipper. “I’ve seen something I want to buy before we go home.”
「今日で休みは終わりだね」キッパーが言いました。「うちに帰る前に買いたいものがあるんだ」
- PG 2: Kipper took Biff and Chip to an old shop. Inside, it looked dark and dusty. In the window was a model of a fishing boat.
“I want to buy that boat,” said Kipper.
キッパーはビフとチップを一軒の古いお店に連れて行きました。中は薄暗く、ほこりをかぶっているように見えます。窓の中に釣り船の模型がありました。
「あの船を買いたいな」キッパーは言いました。
- PG 3: The shop was full of things for boats. An old man sat in the corner.
“Excuse me,” said Chip. “We’d like to buy the model boat. How much is it?”
店の中は、船に関するものでいっぱいでした。一人のおじいさんが店の隅に座っています。
「すみません」チップは言いました。「あの模型の船を下さい。おいくらですか？」
- PG 4: “It’s not for sale,” said the old man. “The boat is a model of my great grandfather’s fishing boat. It was made after he was lost at sea.”
“What happened to him?” asked Biff.
「売り物じゃないよ」おじいさんは言いました。「あの船はわしのひいじいさんの釣り船の模型でな。彼が海でいなくなった後に作られたものだ」
「何があったんですか？」ビフはたずねました。
- PG 5: “No one knows,” said the old man. “One day he went to sea in his boat

and he never came back.”

The old man began to cough.

“Now go away. I want to shut the shop,” he said.

「だれも知らんのだ」おじいさんは言いました。「ある日、自分の船で海に出て行ったきり、戻らんかった」

おじいさんは咳をしはじめました。

「さあ、もう行ってくれ。店を閉めたいんでね」おじいさんは言いました。

PG 6: Kipper was upset. “He wasn’t a very nice man,” he said. “Never mind, Kipper,” said Mum. “I’ll buy you an ice lolly to cheer you up.”

キッパーはがっかりしました。「あのおじいさん、あんまり感じよくなかったな」キッパーは言いました。

「気にしないで、キッパー」お母さんが言いました。「アイスクャンディーを買ってあげるわ。だから元気を出して」

PG 7: The children sat on the sea wall eating their lollies. Suddenly, they heard a cough. It was the old man. He was holding a little model rowing boat. “What do you want?” asked Biff nervously.

子どもたちは防潮堤に座ってアイスを食べていました。突然、咳が聞こえました。あのおじいさんでした。小さな模型の手漕ぎボートを手にしています。

「何かご用ですか？」ビフはいらいらして言いました。

PG 8: “I am sorry I was rude,” said the old man. “I’ve bought you a present.” He gave Kipper the little boat.

“It’s from the model you liked,” he said.

「さっきは失礼した。すまなかったね」おじいさんは言いました。「君にプレゼントを持ってきたんだ」おじいさんはキッパーに小さなボートをくれました。

「これは君がほしがっていた模型の船の一部だよ」

PG 9: The little boat was made of wood. It looked very real. It even had a little pair of oars.

“Oh, thank you,” Said Kipper. He looked up, but the old man had gone.

小さなボートは木でできていました。本物そっくりでした。小さな一組のオールまでついています。

「わあ、ありがとう」キッパーは言いました。キッパーが見上げると、そこにはもうおじいさんはいませんでした。

PG 10: “It’s time to go home I’m afraid,” said Dad.

“Did you see where the old man went?” asked Chip.

“What old man?” asked Dad.

「さあ、家に帰る時間だよ」お父さんが言いました。

「おじいさんがどこに行ったか、知ってる？」チップがたずねました。

「おじいさんって？」お父さんがたずね返しました。

PG 11: When they got home, the children went to Biff’s room. They wanted to play with the model boat.

“Oh!” said Chip. “I’ve broken off an oar!” Just then the key began to glow.

家につくと、子どもたちはビフの部屋へ行きました。模型のボートで遊びたかったのです。

「ああ！」チップは言いました。「オールが一本とれちゃった！」ちょうどその時、鍵が白く光り始めました。

PG 12: The children landed in water. The magic had taken them out to sea.

“Where are we?” yelled Biff. “I’m scared!” said Kipper.

“I’m not a very good swimmer.

子どもたちは水の中に落ちました。魔法の力が三人を海に連れてきたのです。

「ここ、どこ？」ビフが悲鳴をあげました。

「怖いよお！」キッパーが言いました。「ぼく、泳ぎはあまり得意じゃないんだ」

PG 13: Suddenly, the oar splashed into the sea next to them.

“Hold on to the oar!” said Biff. “It will keep us afloat.”

突然、一本のオールがザブンと海に落ちてきました。子どもたちのすぐ横にです。

「オールにしっかりつかまって！」ビフが言いました。「そうすれば浮かんでいられるから」

- PG 14: The children held on to the oar. They floated for a long time.
“There’s nothing but sea,” said Biff.
“I don’t like this adventure,” said Chip.
子どもたちはオールにしがみつきました。そして長い時間浮かんでいました。
「見渡す限り海ね」ビフは言いました。
「こんな冒険、まっぴらだ」チップは言いました。
- PG 15: It began to get foggy. Then they saw a strange shape through the fog. It was getting bigger and bigger.
“Now I’m scared!” said Biff.
霧が濃くなってきました。すると霧の向こうに不思議な形が見えました。それはどんどん大きくなっていきます。
「私も怖くなってきたわ！」ビフは言いました。
- PG 16: A sailing boat came out of the fog. It drifted towards the children.
“Over here!” shouted Chip.
“Help!” yelled Kipper.
“I can’t see anyone,” said Biff.
一隻の帆船が霧の中から現れました。子どもたちの方へゆっくり近づいてきます。
「こっちだ！」チップは叫びました。
「助けて！」キッパーは大声を出しました。
「誰も見えないわ」ビフが言いました。
- PG 17: As the boat got near, Chip saw a rope hanging into the water.
“Tie the rope to the oar, then we can climb on board,” said Chip.
船が近くまで来ると、チップはロープが水の中にたれさがっていることに気づきました。
「オールにロープを結びつけるんだ。それから船によじのぼろう」チップは言いました。

- PG 18: They climbed up on to the boat.
“Phew!” said Kipper. “That was scary.”
“Let’s find the crew,” said Biff. “They can tell us where we are.”
子どもたちは船によじのぼりました。
「ふう！」キッパーは言いました。「怖かったなあ」
「乗組員をさがそう」ビフは言いました。「ここがどこなのか、教えてもらいましょう」
- PG 19: They looked around. On deck there were nets and baskets of fish. There was an open hatch leading down into the boat.
“Maybe they are down below,” said Chip.
子どもたちは辺りを見回しました。甲板の上には魚用の網やかごが置いてあります。昇降口が開いていて、船の中に降りられるようになっていました。
「乗組員は下にいるかもしれない」チップは言いました。
- PG 20: The children went down into a large cabin. It was lit by lamps. There was a big table in the middle of the cabin. The table was set for dinner.
子どもたちは大きな船室に降りていきました。ランプが灯っています。部屋の中央に大きなテーブルがあります。テーブルには夕食の準備が整っていました。
- PG 21: In the corner, a big pot of stew was bubbling away on a stove. On the table there were five mugs of hot tea.
“This is strange,” said Biff. “There’s nobody on board.”
部屋の隅にはシチューの入った大きななべがあり、ストーブの上でぐつぐつ煮立っています。テーブルの上には熱い紅茶の入ったマグカップが五つありました。
「変だわ」ビフが言いました。「誰もこの船には乗ってない」
- PG 22: “There has to be,” said Chip. “Why would the food be hot?”

“And who lit the lamps?” asked Kipper.

Suddenly, there was a loud crash above them. The boat shook.

「誰がいるはずだよ」チップは言いました。「でなかったら、食べ物が温かいわけがない」

「それにランプは誰がつけたのさ？」キッパーがたずねました。

突然、上のほうからガチャンというものすごい音がしました。船が揺れました。

PG 23: The children ran up on deck. The fog had gone. It was windy.

“The crash must have been the sail,” said Biff. “It has caught the wind.”

“The boat’s turned around!” said Chip.

子どもたちはデッキまでかけ上がりました。霧は消えていました。風が強くなっていました。

「さっきの音はきつと帆がたてた音だわ」ビフが言いました。「風に当たったのよ」

「船が向きを変えたぞ！」チップが言いました。

PG 24: The boat started to move quickly.

“I’ll try to steer it,” said Biff.

“Good,” said Chip. “I’ll tie down the sail. Kipper, go to the front and look out.”

船はすいすい動きだしました。

「私が操縦してみるわ」ビフが言いました。

「よし」チップが言いました。「ぼくは帆を縛りつける。キッパーは舳先に行って注意して見てくれ」

PG 25: “Look out!” shouted Kipper. “Rocks!”

“Hold on!” shouted Biff.

She turned the wheel hard. Chip fell over, but the boat missed the rocks.

“That was close!” yelled Kipper.

「気をつけて！」キッパーが叫びました。「岩だ！」

「つかまって！」ビフが叫びました。

ビフはハンドルを力いっぱい回しました。チップは倒れましたが、船は岩をかわしました。

「危なかったね」キッパーが大声で言いました。

PG 26: The boat sailed on. Suddenly, Kipper saw a little rowing boat. In it were two men and a boy. They were waving.

“Help us!” they shouted. “We can’t row. We’ve only got one oar!”

船は進み続けました。突然、キッパーは小さな手漕ぎボートの存在に気づきました。そこには二人の男の人と、一人の男の子が乗っています。三人は手を振っています。

「助けてくれ！」三人は叫びました。「ボートがこげないんだ。オールが一本しかなくてね！」

PG 27: Chip pulled up the oar. He threw it to the men. They caught the oar. Then the men rowed to the boat and climbed on.

チップはオールを引き上げました。そして三人に向かって投げてやりました。三人はオールを受け取りました。そしてボートを漕ぎ、船にのぼってきました。

PG 28: “Who are you?” asked Biff.

“I’m Captain Turbot, this is Flounder, and the boy’s called Shrimp,” said the Captain. “This is our boat, The Barnacle.”

「あなた方はどなたですか？」ビフがたずねました。

「わしはターボット船長、こっちはフラウンダー。そしてその少年はシュリンプだ」船長は言いました。「これはわたたちの船、バーナクルだ」

(*編集部注:ここで固有名詞として使われている単語の元々の意味は、turbot はヒラメなどの扁平な魚、flounder はもがきながら進む(こと)、shrimp は小エビ、barnacle はフジツボ)

PG 29 “What happened to you?” asked Kipper. “We were about to eat,” said Flounder. “Shrimp was pulling up the last net when we struck a rock and he fell in.”

「何があったんですか？」キッパーがたずねました。

「我々は食事をしようとしていたところだった」フラウンダーが言いました。

「シュリンプは最後の網を引き上げていたんだが、船が岩にぶつかった

はずみで、海に落ちてしまったんだ」

PG 30: “We got in the boat to help him,” said the Captain, “but we only had one oar. We couldn’t row back.”

“Where did you find our oar?” asked Shrimp.

「シュリンプを助けようとボートに乗り込んだんだが」船長は言いました。

「オールが一本しかなくて、漕いで戻ってこることができなくてね」

「君たち、どこでオールを見つけたの？」シュリンプがたずねました。

PG 31: “It’s a mystery” said the Captain. “We always keep the oars in the rowing boat.”

Chip thought about the model. “It *is* a mystery,” he said.

Suddenly, the magic key began to glow.

「不思議だのう」船長が言いました。「いつもオールは手漕ぎボートの中に入れておくんだが」

チップは模型のことを考えました。「本当に不思議ですね」チップは言いました。

突然、マジックキーが光り始めました。

PG 32 The magic took them back to Biff’s room.

“Oh no!” said Kipper. “We left the oar.”

They look at the model boat. It had both its oars.

“It’s a mystery,” said Chip.

魔法の力が子どもたちをビフの部屋へ連れ戻しました。

「しまった！」キッパーが言いました。「オールを置いてきちゃった」

子どもたちは模型のボートを見ました。すると、オールは二本ともそこにありました。

「不思議だなあ」チップが言いました。

The Big Breakfast 「たっぷりの朝ごはん」

- PG 1: “Ding, ding! Ding, ding!”
Dad came into Chip’s room. He was ringing a bell. Chip sat up in bed.
“It’s time to get up,” said Dad. “Mum’s away and we have a lot of jobs to do.”
「カン、カン、カン」
お父さんがチップの部屋に入ってきました。ベルを鳴らしています。チップはベッドに起き上がりました。
「起きる時間だ」お父さんは言いました。「お母さんがいないから、山ほど仕事があるんだぞ」
- PG 2: Dad rang the bell on the stairs.
“Time to get up!” he called.
“Do we have to?” asked Biff. “It’s the weekend.”
お父さんは階段でベルを鳴らしました。
「起きる時間だ！」お父さんは叫びました。
「起きなくちゃだめ？」ビフはたずねました。「週末なのよ」
- PG 3: “Yes,” said Dad. “Mum gets back tonight. The house is a mess. We must tidy up.”
“I suppose so,” yawned Chip.
“Good. I’ll start breakfast,” said Dad.
「だめだよ」お父さんはいいました。「今夜お母さんが帰ってくる。なのに家の中はめちゃくちゃだ。片付けておかなくちゃ」
「そうだね」チップがあくびをしながら言いました。
「よし。朝ごはんにしよう」お父さんは言いました。
- PG 4: The children came down for breakfast.
“Bad news.” Said Dad. “The milk has gone off, I’ve burned the toast and we’ve run out of juice. I’m sorry.”
“Oh no!” said Kipper. “I’m hungry!”

子どもたちは朝ごはんを食べに降りてきました。

「悪い知らせだ」お父さんは言いました。「牛乳が腐ってる。トーストはこがしちゃったし、ジュースは切らしてる。すまないな」

「えー、そんなあ！」キッパーが言いました。「おなかすいたよー」

PG 5: “We’ll have to go to the supermarket,” said Dad.

“We need some more food.”

“I’ve got a better idea,” said Chip.

“Let’s have breakfast in the café.”

「スーパーに行かなくちゃ」お父さんは言いました。「もう少し食べ物がある」

「もっといいこと思いついた」チップが言いました。

「カフェで朝ごはんを食べようよ」

PG 6: “You can eat what you like,” said Dad. “Then we’ll do the shopping.”

“Hooray!” said Kipper. “I’m going to have a big breakfast!”

「何でも好きなものを食べなさい」お父さんが言いました。「それから買い物に行こう」

「ばんざーい！」キッパーが言いました。

「たっぷり朝ごはんを食べる」

PG 7: “I’d like blueberry pancakes,” said Biff.

“I want eggs,” said Kipper.

“Why not have a kipper, Kipper?” said Chip.

“Only if you have chips, Chip!” said Kipper.

「ブルーベリーパンケーキを下さい」ビフが言いました。

「ぼくにはタマゴを」キッパーが言いました。

「*燻製の魚にしろよ。キッパー」チップが言いました。（*編集部注：イギリスでは燻製の魚を kipper という）

「チップが*フライドポテトにするんならね」キッパーが言いました。

（*編集部注：フライドポテトはイギリス英語では chips、アメリカ英語では French fries）

PG 8: At home, Dad told the children to start their jobs.

“I’ll put the shopping away” he said. “You go and tidy your rooms. That big breakfast should give you lots of energy.”

家に戻ると、お父さんは子どもたちに仕事を始めるように言いました。「私は買ってきたものを片付ける」お父さんは言いました。「お前たちは自分の部屋を片付けなさい。朝食をたっぷり食べたんだ。元気いっぱいだろ」

PG 9: The children looked at the mess.

“Let’s tidy up later,” said Chip. “I’m so full, I can’t move!”

“No chance of a walk then,” thought Floppy.

Just then, the magic key began to glow.

子どもたちは部屋のちらかり様を目にしました。

「片付けは後にしよう」チップは言いました。「おなかがいっぱいすぎて、動けないよ！」

「散歩には連れていってもらえそうにないな」フロッピーは思いました。ちょうどその時、マジックキーが白く光り始めました。

PG 10: The magic took them back in time. It took them to a big house. It took them into a large hall with a big staircase.

“It’s still dark outside,” said Biff.

“Ding, ding!” A bell began to ring.

魔法の力が子どもたちを昔の時代につれていきました。一軒の大きな家へつれていきました。大きな階段のある大きなホールにつれていきました。

「まだ外は暗いわ」ビフが言いました。

「カン、カン！」ベルが鳴り始めました。

PG 11: Suddenly, a door opened. A little girl came in. She was holding a candle.

“I’m Rose. You must be the new servants. The housekeeper will see you now. Follow me,” she said.

突然、ドアが開きました。そして小さな女の子が入ってきました。手にはろうそくを持っています。

「私はローズ。あなたたちは新しい使用人ね。*ハウスキーパーがあなたたちに会うわ。ついてきて」女の子は言いました。

(*編集部注...ハウスキーパーは、上流階級の家庭に置かれた最高位の女性使用人。家庭全体の管理をまかされ、他の使用人たちを束ねる)

PG 12: Rose took them down a corridor into a large storeroom. The housekeeper was waiting for them.

“You are late,” she said, sternly. “There are lots of jobs to be done.”

ローズは廊下を通して、子どもたちを大きな貯蔵室に連れて行きました。

ハウスキーパーは子どもたちを待っていました。

「遅いじゃないの」ハウスキーパーは厳しく言いました。

「やらなきゃいけない仕事は山ほどあるんだよ」

PG 13: She gave the children lists of jobs.

“Begin with the cleaning,” she said. “It has to be done before breakfast.

Ah! I see you have brought a dog. Good.”

ハウスキーパーは子どもたちに仕事のリストを渡しました。

「掃除からはじめてちょうだい」そう言いました。「朝食までには終わらせるのよ。おや！犬を連れてきたんだね。それはよかったわ」

PG 14: Rose took them to a large kitchen.

“This is Mrs Fry,” said Rose. “She’s the cook.”

“Hello,” said Mrs Fry. “I see you have brought a dog. Good.”

ローズは子どもたちを大きな厨房へつれて行きました。

「こちらはフライ夫人」ローズは言いました。「料理係よ」

「よろしく」フライ夫人は言いました。「犬を連れてきたのね。それはよかった」

PG 15: “Why is everyone pleased that we have brought a dog?” asked Chip.

Mrs Fry pointed at a wooden wheel.

“Put your dog in here,” she said.

“I may not like this” thought Floppy.

「どうして皆さんは、ぼくたちが犬を連れてきたことをそんなに喜んでいらっしやるんですか？」チップはたずねました。

フライ夫人は木の車輪を指差しました。

「ここに犬をのせるんだ」夫人は言いました。
「なんだか嫌な予感」フロッピーは思いました。

- PG 16: Rose put Floppy inside the wheel.
“The wheel turns the meat over the fire,” said Rose. “It stops the meat burning.”
“You look like a giant hamster,” laughed Kipper.
ローズはフロッピーを車輪の中にのせました。
「その車輪で火の上のお肉を回転させるの」ローズが言いました。「お肉がこげないようにね」
「巨大なハムスターみたいだよ」キッパーは笑いました。
- PG 17: “Now we must hurry, there’s so much to do,” said Rose. “Lord Plum will be up soon. We must finish the jobs, then we can get his breakfast ready.”
「さあ、急がなくちゃ。やることは山ほどあるんだから」ローズは言いました。「プラム卿がもうすぐ起きていらっしやるわ。朝食の準備にとりかからなくちゃ」
- PG 18: Mrs Fry put the meat on the spit. “We need this for Lord Plum’s breakfast.”
She looked at Floppy.
“Keep walking and don’t stop!” she said.
“Funny way to get a walk,” thought Floppy.
フライ夫人は串に肉を刺しました。
「これはプラム卿の朝食にいるのさ」
それからフロッピーのほうを見ました。
「歩き続けるんだ。足を止めないで！」夫人は言いました。
「おかしな散歩の仕方だな」フロッピーは思いました。

- PG 19: “What else is for breakfast?” asked Biff.
“Kippers, oyster bread, beetroot pancakes, ale and ice-cream. Nothing too fancy,” said Rose. “I’ll get it ready. You get on with the jobs on the list.”
「他には朝食に何を出すの？」ビフがたずねました。
「燻製の魚に牡蠣のパン、ビートの根のパンケーキ、ビールにアイスクリーム。特別なものはないのよ」ローズが言いました。「ここは私が準備する。あなたたちはリストにある仕事をして」
- PG 20: Biff had to scrub the clothes clean. She beat the rugs.
ビフは洋服をごしごしきれいに洗わなくてはなりませんでした。
敷物をたたきました。
- PG 21: Then, she had to make some bread... ..and put powder on some wigs.
それからパンを作り、かつらに髪粉をふりかけなくてはなりませんでした。
- PG 22: Chip had to clean all the fireplaces. Then, he had to collect a lot of coal.
チップはすべての暖炉の掃除をしなくてはなりませんでした。
それから大量の石炭を集めなくてはなりませんでした。
- PG 23: Next, he had to polish the silver... ..and polish all the boots.
次に、銀食器を磨き、それに靴も全部磨かなくてはなりませんでした。
- PG 24: Kipper churned milk to make butter. He got ice cream from the icehouse.
キッパーは牛乳をかき回してバターを作り、氷貯蔵庫からアイスクリームを取ってきました。
- PG 25: He had to carry water to the bathrooms... ..and scrub all the floors.
浴室まで水を運び、そして家中の床を磨かなくてはなりませんでした。
- PG 26: “Come quickly,” said Rose. “The food is ready. We must take it to the dining room.”
“Hurry up and don’t forget Lord Plum’s newspaper,” said Mrs Fry.

「早く来て」ローズが言いました。「食事の用意ができたわ。食堂に運ばなくちゃ」
「急いどくれ。それからプラム卿の新聞を忘れるんじゃないよ」フライ夫人は言いました。

PG 27: The children put out the dishes on a big table. "Hurry up," said the housekeeper. "Lord Plum will be down soon. He won't want to see you in here."

子どもたちは大きなテーブルに料理を置きました。
「早く」ハウスキーパーは言いました。「プラム卿がもうすぐ降りていらっしゃる。あの方はここでおまえたちの顔なんて見たくないんだ」

PG 28: At last, breakfast was finished.

"Was Lord Plum happy with his breakfast?" asked kipper.

"No!" said the housekeeper. "You forgot to iron his newspaper!"

ようやく朝食は終わりました。

「プラム卿は朝食に満足されていましたか？」キッパーはたずねました。
「とんでもない」ハウスキーパーが言いました。「おまえたち、新聞にアイロンをかけるのを忘れただろ」

PG 29: "I'm worn out," said Kipper.

"I never want another walk," said Floppy.

"At least we can have a rest now," said Chip.

「もうくたくただよ」キッパーが言いました。

「これ以上の散歩なんてまっぴらだ」フロッピーが言いました。

「ともかく、やっと休憩できるね」チップが言いました。

PG 30: "A rest?" said Rose. "We have to start getting ready for lunch!"

Suddenly, the magic key began to glow. It was time to go home.

"What a relief!" said Biff.

「休憩？」ローズが言いました。「昼食の準備を始めなくちゃならないのよ」

突然、マジックキーが白く光り始めました。家に帰る時間が来たのです。

「ああ、よかった！」ビフが言いました。

- PG 31: “That was hard work,” said Biff. Dad came into Biff’s room.
“Hurry up,” he said. “We’ve still got lots of jobs to do. Then we have to walk Floppy.”
“Oh no!” said everyone.
「大変な仕事だったわね」ビフが言いました。
お父さんがビフの部屋に入ってきました。
「急ぎなさい」お父さんは言いました。「まだまだ仕事は山ほどあるんだよ。その後フロッピーを散歩にも連れて行かなくちゃならないし」
「えー、そんなあ！」みんなが言いました。

- PG 32: Early next morning, the children made Mum a surprise breakfast.
“What a big breakfast!” said Mum. “You have gone to so much trouble.”
“It was nothing,” said Biff.
次の日の朝早く、子どもたちはお母さんに内緒で朝ごはんを作ってあげました。
「なんてたっぷりの朝ごはんなの！」お母さんは言いました。
「大変だったでしょう」
「どうってことなかったわ」ビフが言いました。